gan iyun ki niwa, hêsahêsa tui nu
さう言ふ時には、早々鶏が

ikiratatu horasa di,
生かされたので嬉しがつて

ayama tu wate châyuye shun di saki numikwa shi,
姉と二人お茶祝ひをするとて酒を飲み過し、

furudi amadai ni yamachamu di iiyô.
轉んで雨滴石に打病またと言へよ。

Nâyagati mataradana, miichi nu suji hikatunu
も艫て待ちあぐんで、三つの筋の引かれた

ha-a muchi kyurasanu unagu nu kyûshi ga,
傘を持つて美しい女子が來る筈だが、

ura dûshi michi ariwa du unu unagu ati aru,
お前は自分で見てあればその女子見分けもつこうが、

ura wa ati nântuni, ura du kara chukuchi mu
お前は見分けつかぬから、お前自分からは一口も

muni iina yo ya, tuji naru unagu wa, niga nata wa
物言ふなよね、お前の妻なる女子は、どうしてあなたは

namadu matarana ataru di yunu mun du yantuni,
今まで待ちあぐねさせましたかと言ふ者がそれだから、

gan iyun tuki niwa, tui nu ikiratatu hôrasa di,
さういふ時には、鶏が生かされたので、嬉しいとて

hyû wa himma nibui shii du yaru,
今日は晝寢をした爲だ、

gassa iiyo." gassa hatati yarashun gi dero.
それ丈言へよ」それ丈教へてやるわけです。

mû nayunu gi shi du hana murati,
聟になる事になつて花を貰つて、

tui ikiyunu hana du muroti, ura ikiyunu hana wa
〔それも〕鳥を生かせる花を貰つて、お前を生かせる花は

nusudidu kichi, ura ikitando ya, inuchi nu shû yantuni
盜んでそ來て、お前を生かせたのだよ。命の主であるから、

Fananu-môshin-gushiku chi mû nari yo."
花のモーシン城へ聟になれよ。」

"Nihedero ayama, nata ukagishi tasukaya butantuni,
「有難う姉さん、あなたのお影で助かりましたから、

udada ikyabumu."
早々參ります。」

"Ama iji chukuchi atimu kinyu kichashi wa
「彼處へ行つて一言でも昨日來たのは

aya du yaru di iyutu wa, kubi kiyayundo ya,
姉であつたなどゝ言ふたら、首を斬られるよ、

mâ kara tui ikiyunu hana murotankya tui ikirati,
此處から鶏を生かせる花を貰つたら鶏が生かされて、

hôrasha ayabumu di bê iiyoya,
嬉しう御座います、とばかり言へよ。

ura fijê-jira ni châma wa hana nu taradana,
お前の左面に僅かばかり花が足りなかつたので、

chikiti nânu mâ wa kurusa-antuni, ikutu shigu,
こすりつけてない處は黑くなつてゐるから、行つたら直ぐ、

nuga nata chira wa hyû wa kurusa nu kizu chicharo,
どうしたのですあなたの顏は、今日は黑い疵が付いてゐます、

Yijo wa ikyumu. Ijan tukuru ga sugu,
キジヨは行く。行つた處が直ぐ、

nakaramichi mu kâraji, mura nu nishi nu ijibata
半途も行かぬうち、村の北の出端〔まで女子は〕

mukengya kichamu. Mâkara agan kyurasa nu
迎へに來た。彼處からあんなに美しい

unagunu kyûshi ga, ari arami yâ umutu nu uchi ni,
女子が來るが、あれではないだらうか——、思つてゐるうち

hasa nu suji wa miichi ka yâ, yûchi ka yâ di umuti
傘の筋は三つかな、四つかなと思つて

unu uuchi ni, "niga nata ya asa hêsa môri diwa,
ゐるうちに、「どうしてあなたは、朝早くお出なさいといふのに

namadu gari mataranu," gan ichatu, "tui ikiyunu
今まで待ちあぐねさせたか」斯う言つたので、「鷄を生かせる

hana muroti tui nu ikiratatu, hôrasa di
花を貰つて鷄が生かされたので、嬉しいとて

aya tu châyuye shi, asani shi du namadu nataru."
姉とお茶祝ひして、朝寢して今になつた。」

"Niga nata hije nu hô nu kurusa nu kizu wa,
「どうしました、あなたの左の頰の黑い疵は、

kinyu môchanu tuki ni wa ikya mu nâdana
昨日來られた時は何ともなくて

ganshi kyurasa atanu umuti ni, hyû wa
あんなに美しかつたおもて(面)に、今日は

kurusa nu kizu chikitaru." "Tui nu ikiratatu hôrasa di,
黑い疵をつけましたか。」「鷄が生かされたので嬉しいとて

ayama tu wate châyuye shun di yûti,
姉と二人お茶祝ひするとて酔つて、

amadai ishi ni yamachamu." "Natta ga hurubinu bâ nu
雨滴石に打病ました。」「あなたが轉ぶ樣な事が

atidu namadu mônu faji di mûti,
あつてこそ今頃來られる筈と思つて

chû ikiyunu fana nê wa muchi akyumu," di chikitamu.
人を生かせる花を少しは持つて來てゐます」とてつけた。

Gan shankya fuka tu mûnu kawara nu kutu,
さうした處が外と少しも變らぬごと

mutu nu iru natamu. Urikara fôrasha umuti iji,
元の色になつた。それから嬉しくなつて行つて〔聲になつて〕、

uya tatoru nimu ichorati, aya nu shike nu dariyunkya,
親二ところからも大事にされて、姉の暮し向が衰へる時は

Fananu-moshin-gushiku kara muchi iji,
花のモーシン城から〔物を〕持つて行き

Fananu-moshin-gushiku nu shike nu dariyunkya,
花のモーシン城の暮し向が衰へる時は、

ayama ga shike kara muchi iji, unu takine wa
姉の世帶から持つて行つて、其二株は

namaga namagadi mu yukwa kurashi shûmu.
今が今までも良い暮しをしてゐる。

Gassa tûsa.
ガツサトウーサ。

▷此の話は平氏からも梗概を聞き得たが、構造は全く同じもの丶樣であつた。その話では弟の名はキジヨーで、姉の名はキヌムスビとなつてをり、花のモーシングスクは花のムイグスクとなつてゐた。（六月九日　差司氏）

三九　黄金花咲く珠

昔王様が、身持の妻が朝飯の膳を出す時、過つて庇を放つたので、こんな妻はうちに置くことはならぬと言つて家を出した。妻は王様の家を出て、やがて男の子を産んだ。子供は夜の明けるごと成長して、七つの歳になつて、母に對つて、「母々、私は父はないのですか」と訊くと、母は「お前はまだ若いから語られぬ」と言ふ。それを是非聞かしてくれと言つて承知しないので、「實はお前は王様の子であるが、斯々のわけで家を出されたのである」と打ち明けると、子供は「就ては母は六角の珠を持つてゐますか」と言ふ。「六角の珠を持つてゐる。それは王様が私を出す時に呉れられたものである」と言ふと、「ではその珠を私に下さい」と言つて、それを持つて王様の處へ出かけて行つた。

子供は六角の珠を持つて、王様の門前へ行つた。さうして

黄金花咲く珠買ひめされ（fuganibana sakyunu tama koinshore）

と叫んだ。王様は最初の程は聞かぬ振をしてゐられたが、夜の明けるから暮れるまで喚び續けてゐるので、終ひに怒つて、「あの嫌な（yumushikanu）子供を連れて來い」と家來に命じられた。子供は王様の前へ出る時、東の方の上座の入口から上つた。「お前は本當に黄金花咲く珠を持つてゐるか」と王様が聞かれる。「持つてゐますが、庇を放らぬ女が作らぬと花は咲きません」と答へると、「庇を放らぬ女があるものか」と言はれるので、「それなら何故王様は私の母を出されました。私は母から貰つた珠を持つてゐます」と言つて六角の珠を出したら、王様はそれを見て、「さうであつたか、自分が悪かつた。金澤山上げるから、歸つて母を養ふが良い」と言はれる。然し子供は、「私は王様の兄子です、分家することは出來ません」と言つて承知しないので、王様は家の子供を分家させて、此の子を後取りにしたといふ事である。（六月九日　差司氏）

異話　沖永良部島の乃呂が、十七になる娘を連れて那覇の王様の處へ行つた。娘は王様のお氣に召し、やがて身持になつた。後は標題の話に同じい。但し子供は金の成る胡瓜を買はぬかと呼び歩く。素性が知れて、子供は大島、喜界、德之島、沖永良部島、與論島の五島の島主になる。（五月十九日　山本ナツ女）

四〇 蛇聟入 其一

シン長者が女の子を三人持つてゐたが、一番末の娘が十五歳の時彼女等の母が死んだ。一七日の祭をするには、忌拂薪(imifare tâmunu)を取らなければならない。父は山へ行つて其薪を澤山取つてまるけて、擔ぎ上げようとしたが重くて上げる事が出來ないので、「誰かこれを肩めらせる人があれば、三人の娘のうち誰でも一人は呉れて良いが――」と獨言をいふと、其處へアマタ(蛇の一種)があらはれて、「本當に呉れるね(yu kuriyura'ya)」と言ふ。父はこんな者が上げ得るものかと思つて、「三人のうち一人選んで上げる」と言つた處が、蛇は直ぐ薪を肩に上げてくれた。大變な事になつた、言うた以上呉れてやらねばならない――。父はうちへ歸つて薪を下して、心配の餘りアシ(晝食)も食べずに蒲團を被つて寢た。

娘三人が野原や他所から歸つて來た。父は一番上の二十歳になる娘に向つて、「今日は斯々の次第であつた(話者は此處で事の次第を繰返し語る)、お前は蛇の妻になつてくれぬか」と言ふと、「人間の妻にはなれるが、獸の妻になんかなれない」と言ふ。二番目の十八歳になる娘に話すと、これも出來ないと言ふ。もう仕方ない――。三番目の十五歳になる娘に話すと、「私がその妻になります(waga nayumu)、親に生されて親の言ふ事を聞かぬといふ事はない」と言ふ。「さうして呉れ愛する子供(gan shiriyo banashigwa)、もう軈て迎へに來る筈だから」と話してゐる處へ、立派な人が糸衣裳(絹の着物)を着て來られて、明後日根引(嫁迎へ)するからと言つて、持參(土産物)なども持つて來た(これが夫になる人である)。その持參持ちの人々も皆立派な人ばかりである。いよ〳〵明後日になると、迎への者がやつて來て父も姉さん達も共に來て下さいと言ふので、皆行つた。さうして御馳走を受けて、二番娘と父は歸り、一番の姉はその家に泊つた。

三日泊つてから一番の姉が妹に、「親ゲンド(見參)に行かう」と言つて、妹を連れて家を出た。途中に溜池がある。姉が「此處で浴びよう」と言ふと、妹は嫌だと言ふ。それを是非浴びよと言つて、姉は無理に妹の着物を取つて浴びせて、さうして池の中に押込んで殺した。翌日姉は妹の仕度をして、男の家へ行つた(妹に擬裝してその妻になつた)。

死んだ妹は鳥になつた。夫が食事をすると飛んで來て其膳の上に止つて飯をかき廻す。姉が苧を紡むと又それをかき亂す。「あんな奴殺してしまひませう」と女が言ふと、男はさうしようと言つて、其鳥を殺してマキ(豚小屋)に捨てた。處がマキの中に桑の木が生えて、彼等が其處へ行

くと、枝を差延べてじやれかゝる。「あんな桑の木取つて燒きませう」と女が言ふと、さうしよう、と言つて夫は桑の木を燒いた。燒いて起火にしてフーと吹いたら、その起火がチリ〳〵と飛んで行つて姉の眼を燒いた。姉はめくらになつて、或る日マキへ行つたら、マキの石垣が崩れて姉はその下敷になつて死んだ。

死んだ本當の妻が夫に夢を見せた。自分は溜池の脇の穴の中に死んでゐる。この前燒いた桑の木の灰を持つて來て死骸に振りかければ元の人間になる、と言ふのである。夫は灰を持つて行つた。妻の死體は死んだ者とも思はれない程生々してゐた。灰をかけたら妻は生き返つた。夫がどうした事だと訊くと、妻は斯々と次第を語つた。そんなら早く夢を見せれば良かつたと、夫が言つた。死んだ姉の死骸はその穴に埋めた。二人は元の通り夫婦になつて、今が今までもともに居る。(namaga náma madimu agushi umu)。

（六月十日　差司氏）

▽此の話は話者が十六歳位の時、隣の爺さんに聞いたものといふ。

四一　蛇　聟　入　其二

昔母と娘の二人暮しがあつた。夜になるといつもの様に娘の所へ忍んで來る男があつた。母が不審に思つて、今度來たら針に長い絲をつけて男の髪に差してやりなさいと娘に言つた。娘がその通りしたので、母が絲の後を辿つて行つたら絲は蛇の穴に入つてゐた。穴の中に話聲がするので、窃つと聞くと、「自分は人間に子供を孕ませた」、「人間は智慧があるから、カタハニガナ（植物）を煎じて飲ますれば直ぐ子が下りる。さう自慢をするな」と語つてゐる。母はうちへ歸つて娘にカタハニガナを煎じて飲ませ、事なきを得たと言ふ。

（六月十二日　平氏）

類話　針につけた絲は苧になつてゐる。それを男の着物の裾に差す。此の話では單に相手がアーマンダといふ斑蛇であつたといふ丈で終結し、立聞の條は脱落してゐた。（玉江先生）

四二 物言ふ牛

分限者の子供と貧しい家の子供と二人は話し友達（hanashi-agu）で、毎日一緒に學校に通つてゐた。分限者の子供はいつも高膳で飯を食ひ、貧しい家の子はいつも唐芋と鹽を食つてゐた。

或る日學校の先生が貧しい子に、お前はどうして其樣に肥つてゐるかと訊ねる。私はツキヂの飯と白雪のお皿を食べてゐるからです――。變だと思つて先生が子供の家へ行つて見ると、子供は唐芋と鹽を食つてゐる。「白雪の皿は分つたが、ツキヂの飯はどれだ。」「此の唐芋は植ゑると先から芋をつき出します。」「なる程さうだ、まア辛棒して食ふが良い。」先生は歸つた。

或る日分限の子は先に、貧しい子は遲れて學校へ行つた。行く途に仔牛を連れた親牛がゐて、その綱が縺れてゐるので貧しい子がそれを解いてやると、その親牛が物を言つた。

五日は饑え itsuka yasha

七日は水に渴き nanka mizu fushara

と言ふのである。子供は牛を泉の所へ連れて行つて水を飲ませた。その牛は分限者の牛であつた。學校へ行くと分限者の子が、「お前は飯が惡いので遲くなつたのだらう」と言ふ。「お前は道に憐れな牛を見たゞらう、その牛が斯々で遲くなつたのだ」と言ふと、「牛が物を言ふものか」と言ふ。二人は賭けをした。牛が物を言へばその牛は貧しい子が貰ひ、言はなければ彼は分限者の家で三年のたゞ奉公をする約束である。二人は牛の處へ行つた。が牛は一向物を言はず、草ばかり食つてゐる。「さア今日から三年の奉公をせよ」と言はれて、貧しい子が「牛よ、どうしてお前は物を言はぬか」と言ふと、牛は「あなたのお影で命助かつた」と言ふ。「それどうだ（nama ikyayo）」――。約束の通り彼は親牛を貰つた。さうして大事に飼つてゐたら、牛は見違へる樣に肥つた。

又或る日、貧しい子は分限の子に、「二人の牛を鬪はせてみようではないか」と言ふ。「雌牛と雄牛とあはされるものか。」「いや必ずあはされる。」「では勝つた者が負けた牛を取る事にしよう」――。鬪はせた處が雌の親牛が勝つて、分限の子は仔牛を取られた。貧しい子は仔牛を肥らせて賣り、親牛が子を產めば又肥らせて賣り、後には身上が良くなつて、高膳で飯を食ふ事が出來た。先生がそれを見て、「お前は心がけが良いから高膳で飯を食ふ事が出來たのだ、いつも正直で働けよ」と言つた。

（六月十日　差司氏）

▽此の話は話者が幼時、祖母から聞いたものだといふ。

四三　二人博勞

那覇のマンバクヨ（馬博勞）と首里のマンバクヨと仲が良かつた。二人相談して、王様を騙して錢儲けをする相談をした。首里のマンバクヨが十八歳、那覇のマンバクヨが二十歳。「首里のマンバクヨ〳〵、金がないから何とか儲ける工風をしようではないか、」「自分もさう考へてゐる。」「お前の藝は何だ、」「自分は馬と鼠に化ける事が上手だ。」「自分は鷹と鶏になるのが上手だ。就いてはお前は立派な馬になれ、自分が王様に賣つて金を貰ふから、」「馬になるには豪い人の庶に入らなければならん」——。首里のマンバクヨはさる豪い人の庶に入つて忽ち立派な馬になつた。那覇のマンバクヨはその馬に乘つて、王様の館の前を一日中行つては戻り〳〵走らせた。王様がそれを見られて、「良い馬だ、自分が買ふから持つて來い」との事である。「私はマンバクヨです。どうぞ此馬を買つて下さい、」「値段は幾らだ。」「百五十圓です、」「よろしい——。」

王様は馬を買取られた。處が此の馬は夜になると鼻を鳴らして寢るので、王様の家來がそれを聞きつけて、「王様々々、あの馬は人間の様に鼻を鳴らして寢て居ります」と申上げた。王様の命令で馬は直ぐ太繩で縛られた。縛つて見れば首里のマンバクヨである。「お前は悪い奴だ、今日は

成敗してやる。」「仕方はございません。どうぞ成敗して下さい。ですが此の仕事は那覇のマンバクヨも一緒にした事ですから、彼も呼んで一緒に成敗して下さい」——。早速那覇のマンバクヨは王様の前に呼び出された。「どうも大變な無禮を致しました、」「今日はお前も成敗してやる。」「殺されても結構ですが、此世の分れに私共二人に藝をさせて、それを一度御覽になつてからにして下さい。」「それは良からう、」「では庭に長さ三尋の竹竿を立てさせて下さい。」家來達が庭に竹竿を立てると、首里のマンバクヨは鼠になつて竿の先へ上る。今度は那覇のマンバクヨが鷹になつて、その鼠を咥へて、山原の名護へ飛んで行つた。二人は名護の川上の山の中に屋敷を構へ、ジンガウェー（ジンの長者）と呼ばれ、今が今までも良い暮しをしてゐる。（六月十日　差司氏）

四四　古屋の漏

大和に博勞があつて、女の子二人と暮してゐた。博勞は日々あちこちの村を歩き廻り、娘二人は日々鹽焚きをしてゐた。或る日一疋の虎が娘達を喰ひにやつて來た。妹が虎を見つけて姉に、「姉さんは世界中で何が一番恐ろしいか」と言ふと、姉は、「自分は虎が一番恐ろしい」と言ふ。「姉さんは馬鹿だね、私は古屋の漏る（furuya-nu-muru）こそ一番恐ろしい。虎なんか古屋の漏る

自分が積み込まれた。女は娘に、物言ふなと遺言する。娘はよそへ嫁に行くが三年の間物を言はない。それで家を出され、夫に送られて歸る途中唐鳩が、夫一つ妻一つ(uto tiichii tujii tiichii)と歌つてゐるのを聞いて、あゝあの唐鳩は後でも先でも夫一つ妻一つと歌つてゐると言つたので、夫は始めて妻の聲を聞いて、再びうちへ連れ戻つた。(五月二十九日　村山氏)

四六　和尚と小僧

1　問　答

和尚が夜中に妻と問答をする。小僧がそれを聞いて、これは良い事を聞いたと言つて、翌朝馬に乘つて遊びに出かけ、晝頃歸つて來る。「何處へ行つて來た小僧。」「實は早く歸らうと思つてゐたのですが、裾口平原(スヱグチトーバル)(腑)に馬を繫いでおいたら棕梠(クルチク)山へ逃げ、摑まへようとしたらビリタ城(グスク)へ逃げ、そこで摑まへようとしたらマイタ城へ逃げ、其處でやつと摑まへて今までかゝりました。」「見らば見捨て、聞かば聞き捨て、外で話してはならぬぞ。」

2　馬の上の落し物

和尚はお伴の小僧に羽織を持たせ、自分は馬に乘つて出かけるが、途中で脇差を落す。小僧は見らば見捨てよの教への通り知らぬ振してゐる。後で和尚が叱つて、「馬から落ちる物は拾ふものだ」と言ふ。で小僧は羽織に馬の糞を受ける。

3　粟　作　り

和尚が粟作りが好きで、降つても霽れても小僧に馬肥しを擔がせる。粟が取れて粟飯を炊く時小僧が釜の中に尻を放り込んで置いたら、和尚はそれを食つて、「此の粟飯は馬糞臭い」と言ふ。小僧が、「それは餘り馬糞を使ふからですよ」と言ふと、「さうか、折角出來た粟だが仕方がない、誰かに呉れてやらう」、「私の父は貧乏してゐますから、臭くても辛棒して食べます。」小僧は粟を皆貰つて、父の倉一ぱいに入れた。父は毎日粟飯を食つて喜んでゐるさうである。

4　小僧は荒麥

坊さんは自分は米の飯に汁皿つけて食べ、小僧には芋ばかり食はせる。或る日小僧は父が病氣だと言つて、暇を貰つて歸る振りして寺の天井に上り、太鼓を叩いて

腹黑坊主惡坊主
使つてゐる小僧には
しびれ芋食はせて
それで奉公が出來るものか

の喰ひ物だ」――。それを聞いて虎は驚いて後退りを始めた。其處へ博勞の父が歸つて來て、いきなり虎の背中に乘つて、小刀を虎の首に立てた。虎はいよ〳〵古屋の漏るの神に摑まつたと思つて、一散に走つて大和の國を三度廻つて、夜の明方にやつと奥山へ歸つた。さうしたら漏るの神は虎の背中から落ちて穴の中へ入つて了つた。虎は泡をふいて舌をカー〳〵出してゐる。そこへ猿が來て、「どうした虎殿、お前は大男の大力の癖に喘いでゐる」と言ふと、「古屋の漏るの神は恐ろしい物ぞ、彼に乘られて大和の國を三度馳け廻つたらやつと降りた」と言ふ。「いやそれは博勞に相違ない。穴の中を尻尾で搜ぐつて、引張り出して二人で喰つてやらう。」先づ虎が尻尾を入れたら、虎は漏るの神に尻尾を切られて了つた。今度は猿がふぐりを入れたら又切られた。なる程これは漏るの神だ、二人は唐へ遁げよう――。さう言つて海の中へ飛込んだが猿は切られた處が痛んで引返し、虎はそのまゝ唐へ渡つた。だから大和の國には虎はゐないのである。博勞はうちへ歸つた。さうして家を留守にすれば娘達が危いと言つて、博勞をやめて農業をして、今が今でも良い暮しをしてゐる。

（六月十日　差司氏）

▽此の話は現存すれば七十歳位になる護欄部落の前田島平老から聞き傳へたものといふ。

四五　なからの橋

昔那覇に一人の婆さんがあつて、女の子をよそへ嫁にやつてあつた。或る日婆さんが町へ買物に行くと、町の中のナカラ橋を架けてゐる處へ來た。婆さんが、此の橋は髪を七卷き卷いてゐる女を橋の脚に積み込まなければ架からないと言ふ。那覇の國中搜して髪を七卷き卷いてゐる女を搜したら、此の話を言ひ出した婆さんが搜し當てられた。婆さんは積み籠められる時、嫁に行つてゐる娘に、自分は物を言つたばかりにナカラ橋に積まれる、お前は決して物言ふなよと遺言をした。

嫁はそれ以來一向物を言はない。夫が心配して、棘のある焚物を焚かすれば小言でも言ふかと思つて、それを與へると、斧で切つて燃やして何とも物を言はない。もう仕方はない、夫は妻を家から出した。妻が門まで行くと唐鳩が鳴いた。そこで妻が、唐鳩お前は可愛さうに、鳴いたばかりに射られるのだ。吾母は物を言はうとして、ナカラの橋に積まれたと言うた。夫は直ぐ妻を呼び戻した。さうして二人は今が今までも良い暮しをしてゐる。

（五月二十九日　村山氏）

類話　女がナカラの橋を積んでゐる處で、此の橋は生物の頭を積み込まなければ架けられぬと言つたら

自分が積み込まれた。女は娘に、物言ふなと遺言する。娘はよそへ嫁に行くが三年の間物を言はない。それで家を出され、夫に送られて歸る途中唐鳩が、夫一つ妻一つ(uto tiichii tujii tiichii)と歌つてゐるのを聞いて、あゝあの唐鳩は後でも先でも夫一つ妻一つと歌つてゐると言つたので、夫は始めて妻の聲を聞いて、再びうちへ連れ戻つた。(五月二十九日　村山氏)

四六　和尚と小僧

1　問　答

和尚が夜中に妻と問答をする。小僧がそれを聞いて、これは良い事を聞いたと言つて、翌朝馬に乘つて遊びに出かけ、晝頃歸つて來る。「何處へ行つて來た小僧。」「實は早く歸らうと思つてゐたのですが、裾口平原(スヘグチトーバル)(臍)に馬を繫いでおいたら棕梠(クルスク)山へ逃げ、摑まへようとしたらビリタ城(グスク)へ逃げ、そこで摑まへようとしたらマイタ城へ逃げ、其處でやつと摑まへて今までかゝりました。」「見らば見捨て、聞かば聞き捨て、外で話してはならぬぞ。」

2　馬の上の落し物

和尚はお伴の小僧に羽織を持たせ、自分は馬に乘つて出かけるが、途中で脇差を落す。小僧は見らば見捨てよの教への通り知らぬ振してゐる。後で和尚が叱つて、「馬から落ちる物は拾ふものだ」と言ふ。で小僧は羽織に馬の糞を受ける。

3　粟作り

和尚が粟作りが好きで、降つても霽れても小僧に馬肥しを擔がせる。粟が取れて粟飯を炊く時小僧が釜の中に尻を放り込んで置いたら、和尚はそれを食つて、「此の粟飯は馬糞臭い」と言ふ。小僧が、「それは餘り馬糞を使ふからですよ」と言ふと、「さうか、折角出來た粟だが仕方がない、誰かに呉れてやらう」、「私の父は貧乏してゐますから、臭くても辛棒して食べます。」小僧は粟を皆貰つて、父の倉一ぱいに入れた。父は毎日粟飯を食つて喜んでゐるさうである。

4　小僧は荒麥

坊さんは自分は米の飯に汁皿つけて食べ、小僧には芋ばかり食はせる。或る日小僧は父が病氣だと言つて、暇を貰つて歸る振りして寺の天井に上り、太鼓を叩いて

腹黑坊主惡坊主
使つてゐる小僧には
しびれ芋食はせて
それで奉公が出來るものか

腹打ほがして見せよう

と言ふと坊さんは、「小僧にも飯を食はせますから、赦して下さい」といふ。

小僧は暫くして外から歸つて來たやうに見せかけ、「唯今歸りました」と言ふ。坊さんは早速小僧に米の飯を食はせて、「これからはお前にも飯を食はせるぞ」と言ふ。處が毎日米の飯にはありついたが、坊さんは一向汁や皿を食べさせないので、又此前の樣にやつたら誤つて天井から墮ちて了つた。坊さんは雷さんが落ちたかと思つて慄えてゐる。小僧は逃げようとしたが手足が動かずとう〳〵坊さんに發見され、その罰として毎日荒麥三合づゝ食はされて、今迄も大變な目に合つてゐる(namagadimu shó nugiti umu)。

(以上四話、六月十日　差司氏)

四七　玉　取　姫

昔大和のオーシンの寺の坊主加那志が、七月の盆の日に八十人の生徒に向つて、「今日は一人も家へ歸つてはならない」と言つて、皆を寺に泊めた。さうしてその夜中に、坊主加那志は庭の一里廻りの池の水を汲んで寺の屋根にドン〳〵かけ始めた。生徒等も皆加勢して屋根に水をかけた。恰もその時唐のクワンシンの王樣の家の屋根の片側が燃えたが、急に消えてしまつた。王樣は明朝早く起きて、どうして火が急に消えたか不思議だと言つて、殘りの三方の屋根を見せたら、青い水草がいつぱい撒かれてあつた。いよ〳〵不思議に思つて、王樣は國中の巫女を集めて、「どうして火事が消えたか、何故水草が撒かれてあるか」と問うた處が、其中の三人の巫女が、「それは大和のオーシンの寺の坊主加那志が、王樣の急を助けようとて、自分の寺に水をかけたからです。屋根の水草はオーシンの寺の池に生えてゐたものです。オーシンの寺にお禮をなさるが良ろしいでせう」と言ふのである。王樣はその事を手紙で、オーシンの坊主加那志に訊ねた。すると坊主加那志から、實はその夜クワンシンの王樣の館に火事のある事が分つたので、生徒と一緒に自分の屋根に水をかけて助けて上げたのであると言ふ返事が來た。

王樣はオーシンの寺の坊主加那志にお禮をする事になつた。御禮には何が良いだらう、シジゴバンの玉は大和にもなく天にもなく地にもないたつた一つの玉であるから、それを贈つたら良いだらう。處でそれを贈る使者に適はしい正直な者はいくらもあるが、それらの者は腕が立たない。强い大將はあるが正直でない。どうしたもんだらう——、と考へてゐると、マンクショーベーといふ正直で腕の立つ者に氣がついた。王樣はマンクショーベーに米千俵の手間を拂つて、使ひにやる事にした。シジゴバンの玉は錫箱に入れて其上に鐵の箱、其上に更に木の箱を被せて丈夫に

荷造りして、二十三反の船に米を積み込んでその中に箱を隱して、さうしていよ／＼船を走らせた處が、その玉の光がニラの島（海底の淨土）までも照した。ニラの大主はそれを見て、何とかしてその玉を奪ひ取らうと思つて、自分の娘を船へ遣つた。するとそれと同時に船は急に走らなくなつた。何故かと思つて軸を見ると、大きな朱檀が船の軸に引かゝつてゐる。こんな惡い物は打割つて薪にしようと言つて引上げた處が、箱の中から聲が聞える。「中に人が這入つてゐるから、靜かにやつてくれ」と言つてゐる。何者だ――と言つて、靜かに割つた處が、取つて飲む程、照る陽も曇らす程の美しい女があらはれて、マンクショーベーに向つて、「自分を妻にして呉れ」といふ。「自分は大事な用で大和へ行くのだ。王様から女にかゝり合つてはならぬと堅く申しつけられて來た。それ丈は御免だ」と言ふと、「是非も妻にしてくれ、女に望む事を言はれて嫌と言つて濟まされるか」と言はれ、マンクショーベーは仕方なく一緒になつた。處が又その女が言ふ、「あなたは天にも地にもない玉を持つてゐると言ふが、一度丈それを見せてくれ」。「天にも地にもないといふ玉があるものか、自分は王様の命令で此の米、これ丈しか持つてゐない。」「いや必ずある。見せなければ自分で勝手に見る」と言はれ、マンクショーベーは仕方なく、「あるには有るが、これは王様が大和のオーシンの寺の坊主加那志に贈る禮物だから」と言ふと、「夫婦になつた上は一度見せてくれ」と言ふので、全部見せてはいけないと思つて、片方の玉丈を取出して見せたら女はそれを手に取つて、「マンクショーベーといふ人は、斯くも見事な玉を持つて歩くものか」と言ふや否や、その玉を自分の口に入れて海中に飛び込んでしまつた。もう仕方はない。後へ戻らうにも戻られず、先き行かうにも行かれず我身を仕舞らうかと思つたものゝ、まだ片方の玉は殘つてゐる。兎も角それを持つて行つて、坊主加那志に差上げてから相談して見よう。――大和に着いた。オーシンの寺へ行つて、坊主加那志サーレー（御免下さい）を言ふと、坊主加那志は、おう來たかと言はれる。「誠につまらぬ事を致しました。海の上でアマガシ女子（まやかし女子）に逢うて、片方の玉を口に打飲んで海に入つて了はれて取戻す事が出來ず、殘りの片方丈持つて參りました。取られた片方を取戻す仕様を御存知でありませんか」と言ふと、坊主加那志は、「自分は片方でも結構であるが、是非ともお前が言ふなら聞かして上げよう。アガレヤシマのアマガ下女子は雲に三月海に七月居たといふカナイ女子（優れた女）である。その女はいくら金を呉れても取つてくれないが、夫婦になれたら取つてくれる。彼女に取らせるが良からう」と言はれるのである。

マンクショーベーは、アガレヤシマの國へ行つた。さうして彼女を忍んだ處が、話が合つて女

は彼の妻になつた。處が直ぐ玉の事を話せば良かつたのに、否と言はれては大變だと思つてゐるうちに三月になつて了つた。三月目に始めて、「自分は實は頼み事があつて來た。それは斯々の次第」と言ふと、「そんな事なら早く言へば良かつたのに、自分は腹を持つ身になつた。その前なら樂に取戻す事が出來たが、もう腹を持つてゐる。だが命を捨てゝでも取つて見ませう。就ては船の表に藝者を澤山乘せて太鼓三味線で歌遊びをさせて、自分が玉を取つて歸るまで歌遊びをやめないやうにしてくれ。さうして自分の手首に繩をつけて海へ下して、上つて來るのが三時間を一分でも遲れたら早くその繩を引いてくれ」と言つて、いよ〳〵支度が出來ると、女は鑪から海中へ飛込んだ。さうしてニラの島へ潜つて行つた處が、玉はニラの大主の家の床の間に輝いてゐる。表の間から這入らうとすればアナ(鱧魚か、鮫の一種といふ)が見張をしてゐる。北窓から這入らうとすれば鯨が見張をしてゐる。表と中屋の間から這入らうとすれば鱶が見張をしてゐる。玄關の見張りが眠つてゐたので、そこから這入つて玉を取つて我口に打飲み、戻らうとした處が身體が重くて思ふ樣に歩めず、繩を三度叩いて合圖をしたら鱶が其音を聞いて飛んで來て、彼女の片足を喰ひ切つた。女は船の上に引上げられたが、「自分はもう死ぬから、自分の腹を割つて玉を取出して、坊主加那志に上げてくれ」と言つて死んだ。仕方なくマンクショーベーは、玉を取出したが、玉はもう眞黑になつて光らなかつた。それを坊主加那志に上げて詫を言ふと、坊主加那志は、「お前がそれ程難儀をして取つて來たものだから結構である。還つて王樣にお禮を言つてくれ」と言はれた。

マンクショーベーは、アマガ下女子の死體をアガレヤシマに葬つた。さうして唐へ還つて王樣に斯々のわけで長くかゝりましたと申上げて、千俵の米を貰つて今が今までも良か暮しをしてゐる。

（六月十一日　差司氏）

眞話　此の話は平氏からも梗概を聞く事が出來たが、それでは火事を起したのは那覇の王樣で、消してくれたのは唐の王樣になつて居り、從つてマンクショーベーは那覇の男になつてゐる。

四八　妻の計ひ

ミヤマ松太郎が花のマッサンを妻にして、夫婦睦じく暮してゐにが子供がないので、「マッサン〳〵、子供が一人もなくては淋しいから獸でも一つ飼つてはどうだらう」と言ふと、妻も、「班猫でも一つ飼つてみたい」といふので、班猫を捜して來て飼ふことにした。飼つた處がその猫は夜の明けるごと大きくなつて、一月も飼つたら一貫二百匁にもなつて、十月目には何處かへ遁げ

て行つたまゝ再び家へ歸つて來なかつた。

或る日夫は勤めに出て、妻は家で味噌を造る爲に近所の女を四人も賴んで、糀を出してゐた處が、先に家出をした猫がよそ國の百株ある部落の人間を八十株も食つて、今度は此の家の主人を喰ひに歸つて來て、門前でアマ〳〵（母よ〳〵）と呼ぶ。妻が自分を呼ぶのは何者だらうと思つて門の處へ行つて見ると、かねて飼つてあつた斑猫で、暫く見ない間に門柱と同じ高さに大きくなつてゐた。「あゝお前が歸つて來たのか、良く歸つて來て吳れた。實はお前が居なくなつたので心配して、今近所の人を賴んでヤグラの飯（意不明）を澤山拵へて搜しに行かうとしてゐる處であつた。良く歸つて來てくれた」と言ふと、猫は家へ入つて一斗の糀をすつかり食つて了つて、「自分はこれから遊びに出かけるが、主人が歸つても自分の事を話してはいけないよ母」と言ふ。外へ遊びに出るかと思ふと、猫はその家の天井に上つた。妻は近所の女達に、「糀處ではない、皆さんは早く歸つて下さい」と言つて歸して、色々の御馳走を造り始めた。

ふだんは勤めから夜中前に歸る夫が、その日は陽の落ちると直ぐ歸つて來た。「良うこそ早く歸つて來ました。さあ今日はうんと此の御馳走を食べて力をつけて下さい。澤山食べて下さい。」——妻はさう言つて夫にうんと御馳走を食べさせて、さうして今度は、「どうかあなたの戰爭に出る時の仕度を見せて下さい」と言ふ。「どうしてお前はその樣な事を言ふ。」「何でもない事ですが、私はあなたの戰さ仕度を拜み度いのです。」「戰さの仕度は先づこんなものだ。」「それではいけません、もつと本當の仕度をして見せて下さい」——といふわけで、夫は仕方なく仕度をして、「これが本當の戰さの仕度である」と言ふ。「今度は私を長櫃に入れて、サシ（錠）を下して下さい。」夫は言はれるまゝに妻を長櫃へ入れて錠を下した。妻が又櫃の中から言ふ、「今、天井を御覽なさい。」——言うたかと思ふと猫が飛び下りて來て、ミヤオーと唸つて長櫃の片隅を喰ひ破つた。ミヤマ松太郎は始めて意味が分つて、直ぐに刀を拔いて猫に切りかゝつた。さうして二太刀も斬つたら猫は泣き出した。「猫の力は一升落てたむ。父が力は一升上がたむ、今一息きばりなさい」——と言ふ妻の聲に、松太郎は又一太刀を入れた。猫は又泣く。「猫の力は五合落てたむ。父が力は五合上がたむ」と又妻が言ふ。最後の一太刀を入れたら、猫はとう〳〵死んで了つた。死ぬと同時に家の床木が折れて、猫は床下へ落ちて了つた。妻は長櫃から出て、夫と二人で猫の死骸を取出さうとしたが、重くて上げる事が出來ない。それで近所の人を十人賴んで、遠くの原へ擔いで行つて埋めて貰つた。

その事を殿樣が知つて、お前達はお金を褒美に貰ふが良いか、六組の殿頭（トノガシラ）になるが良いかとの

仰せなので、暮しをして行く分には差支へございませんから、殿頭にして下さいと願つて、六組の殿頭になつて、今が今までも良か暮しをしてゐる。

（六月十日　差司氏）

類話・此の話では、「猫の死骸を屋敷の一隅に埋めたら、その死骸から南瓜が生えた。南瓜の蔓や葉に毛のあるのはその爲である」と語られた。他は大體に同じいが、話し方は簡單であつた。出家部落の出家老もこれと同じ話の存在を告げられた。（六月十九日　山本ナツ女）

四九　王様とユタ

ドンドンヒギャといふユタ（物識）があつて、王様と非常に心安くしてゐる。或る日王様の御殿へ鳩が飛込んで天井に止つて、縁に糞などを落した。これは不思議な事である――とて、王様はドンドンヒギャを呼んだ。ドンドンヒギャはやつて來て、鳩に向つて、「深山飛ぶ鳥の人になつて（意不明）、王加那志の家に飛込むは無禮ではないか」と言ふと、鳩は飛出して了つた。すると今度は王様が、「ドンドンヒギャ お前は料理が上手だといふ事だが、一度自分を招んでくれぬか」と言はれる。「明後日使ひをやりますから、是非お出で下さい」と言つて、ドンドンヒギャは、ユタをしたお禮に米二升貰つて歸つた。

明後日、ドンドンヒギャは王様の大切にしてゐられる飼ひ鳥を盗んで來て、その鳥で吸物を拵へて王様に上げた。王様は喜んで、美味い鳥だと言つて召上つたが、大事な飼ひ鳥だと聞いて、さてはと思つたが、「そんなら自分も明日お前に御馳走するから來て呉れ」と言つて歸られた。

王様は門の處に陥し穴を造つて、その中に人糞尿を入れて置いた。ドンドンヒギャはやつて來て、まんまとその中に落ち込んでしまつた。處が着替へに歸つて行くかと思ふと、そのまゝ家の中へ入つて來ようとするので、「臭いから歸つて着物を替へて來てくれ」と言ふと、「私は着替へがありませんから、王加那志のを貸して下さい」と言つて、着物と羽織を借りて着て、御馳走になつて歸つた。その後王様は度々着物と羽織を返せよと請求されるが、ドンドンヒギャは未だに返さない。

（六月十日　差司氏）

五〇　智惠有ウキチ

首里のウキチと那覇のウキチは仲が良かつた。首里のウキチは道樂者で、那覇のウキチは釣好きだつた。

或る夜那覇のウキチが海へ行つた留守の處へ首里のウキチが訪ねて來て、さうして那覇のウキチの妻と仲良くなつた。その樣な事が三度も重つたので、近所の人が見兼ねてその事を那覇のウ

キチに知らせた。或る日那覇のウキチは妻に、「今日は遠い海へ行くから辨當を拵へてくれ、歸りは明後日になる」と言ふ。妻が辨當を造つたので、ウキチは海へ行く振りをして從妹の家へ行つて寢て、夜中に起きて我家へ來て覗つて見ると、首里のウキチと妻が酒肴を前にして遊んでゐる。首里のウキチは死にヤされた。「早く門あきれ。」妻が門をあけたので、那覇のウキチは家へ入つて、「座敷に寢てゐるのは誰だ」と言ふ。「あれは首里のウキチで、あなたに逢ひに來て休んでゐる處です」と言ふので、首里のウキチを起してみたが、起きよう筈がない。那覇のウキチはその脈を取つて見て、「さア大變な事になつた。お前はどうして首里のウキチを死にヤしたのだ」と言ふ。妻は何も知らないので、心配してどうすれば良いかと言ふ。「幸ひ隣の長者の家が、明日は十三年忌の祭だと言つて大騒ぎをしてゐる。お前は首里のウキチの死體を長者の家の臺所の戸口に立てかけて、今晩は慾深者共と呼び、も一度今晩は貧相者共と呼んで遁げ歸るが良い。」——夫に教へられた通り妻はやつて來た。長者の家では惡口を言はれたので、一人の男が、「何者だ、祭をするといふのに惡口を言ふ奴は」と言つて入口に立つてゐる者を撲つたら、その者はバタンと倒れたまゝ物を言はない。「これは大變、何とかして隣のウキチに知惠を借りて、科にならぬ樣にせねばならぬ。」長者は金を百圓持つてウキチを訪ねて、實は斯々のわけだが、良い樣に計らつてくれといふ。ウキチは知らぬ振りをして、何とかしませうと言つて金を貰つた。

ウキチは死體を取つて來て、又妻に向つて、「表の通りに若い者が大勢遊んでゐるから、死體を暗がりに立てゝ彼等に石を投げつけて來い」と言ふ。妻がその通りしたら、又バタンと倒れたまゝ物を言はない。「さア大變だ、うつかり人を殺したが、これは那覇のウキチに金を呉れて知惠を借りるより外はない」と言つてウキチに相談すると、ウキチは二百圓出せば何とかしようと言ふ。若者共は仕方なく二百圓出した。其處でウキチは又妻に言ふ。「これから北の方に向つて行くと高い崖があるから、其處から、此の死體を投げ落せ。」妻はその通りして、自分も惡い事を悟つて死んだ。

那覇のウキチは其後良い妻を求めて、今が今までも良い暮しをしてゐる。

（六月十日　差司氏）

mikkuranigi nu mii kara, Mikkura-unshu ga,
メツクラネギ（植物の名）の處から、メツクラ御主が

ijiti kichamu.
出て來た。

"Niga mâya mâya, nachurô."
「どうしたマーヤ々々、泣いたりして——。」

Dichatu, "shâ yuda wa muratashiga, uwayida nu
と言つたら「下枝はもられたが、上枝が

muraradana du nachuru," dichamu.
もられないので泣いてゐる」と言つた。

"Dii gâriwa watai muiwe shirani." "Gan shi shimimu."
「さあそれなら二人でもり分けしよう。」「さうして良い」——。

Murachan tukuru ga, Mâya ga mê wa, shâ ni wa
〔メツクラ御主に〕もらした處が、マーヤの分は、底には

ômun bê iriti, uwâbi ni wa umimumu fôyafôya shi,
青物ばかり入れて、うはべには熟み桃をちよいと着せて、

nâdu nu mê wa, shâ niwa umimumu bê iriti,
自分の分は、底には熟み桃ばかり入れて

uwâbi niwa ômumu fôyafôya shi,
うはべには青桃をちよいと着せて、

mâya chi iyun tukuru ga,
マーヤに言ふ處は、

"ure, ura mun wa umi mun bê do ya,
「それ、お前の物は熟み物ばかりだよ、

51 Hora nu maya. (No no 1.)

Hôra nu mâya dichi utanu yôshi.
ホーラのマーヤでち（とて）をつたさうな。

hô niti nanima êma amishutankya,
河でナニマエーマ（意不明の由）浴びせてゐると、

ui kara mumunu tani nu nagariti kichi,
河上から桃の種が流れて來て、

kichatu uri tuti muchi kichi,
來たので、それを取つて持つて來て

hyu wa iraba 今日は植ゑらば

acha wa miiri yo, 明日は生えよ

asati wa fana saki yo, 明後日は花咲けよ

yowa wa nari yo, 明々後日は成れよ

ichika wa umi yo, 五日は熟めよ

myâ wa muingya ikyum dô. 六日はもりに行くぞ

dichi úitan tuki niwa, uri ga ichanu tûri, achawa miiti
と言つて、植ゑた處が、それが言つた通り、明日は生えて、

asati wa fana sachi, yowa wa nati, ichika wa udi,
明後日は花が咲いて、明々後日は實が成つて、五日目には熟んで

myâmi ni muingya ijankya, shâ-yuda wa muratashi ga,
六日目に摘りに行つたら、下枝は摘られたが

uwâ-yuda nu muraradana, wii wii nakyutankya
上枝の實は摘れないので、ヲイ々々泣いてゐると

Karabâtu sôti ikyutankya, mata michi kara
唐鳩を連れて行きをつたら、又道傍から

mukaji-nu-shû ga fôti achi.
百足の且那が側つて來たので、

"mukaji-nu-shû, mukaji-nu-shû,
「百足の且那々々、

uniga shima chi tai kurabi shingya ika-jina."
鬼ケ島へ力競べしに行かじな。」

"Nâni mu mêshi wa kadashiga,
「自分も朝飯は食つたが

ashi nu nâdana, chigusu mati ikaramu."
晝飯がないので、血糞たれて行かれぬ」

"Mâ kara wâga, nagamuchi mu iyu mu
「此處に自分は長餅も魚も、

mê mu muchi akyumu." "Gâre iji shimimu."
飯も持つて歩く。」「それならば行つても良ろしい」——。

Nâ michai ikyutankya, hôra nu shii nti,
三人連れて行きをつたら、河の端で

unagi-nu-shû ga yâ gahon gaho asayutatu,
鰻の且那が家の中をガホンガホンあさつてゐたので、

"unagi-nu-shû, unagi-nu-shû, uniga shima chi
「鰻の且那々々、鬼ケ島へ

tai kurabi shingya ikaji na."
力競べに行かじな。」

"Mêshi wa kadashiga, ashi nu nâdana
「朝飯は食つたが晝飯がないので、

wâ du nu mun wa ômun bê do ya,"
俺のものは青物ばかりだよ」——、

dichi mishitatu, mâya wa fôrasha di,
と言つて見せると、マーヤは嬉しがつて、

yâ ji hankarachi michankya, umimun ba
家で〔籠のものを〕出して見た處が、熟み物は

uwabi ni tâchimichi fôyafôya shi atatu, washimichi,
上べに二つ三つちよいと着せてあつたので、腹を立てゝ、

"gânu Mikkura-unshu, nama uda gadi ikyui yo,
「己れミツクラ御主、今何處まで行くか、

uichikiti iji furusanu mun," dichi ikyutankya,
追かけて行つて殺してやらねば」と言つて行きをつたら、

michi nu shii niti karabatu-nu-shû ga fukyutatu,
道傍で唐鳩の且那が歌を歌つてゐたので、

"karabatu-nu-shû, karabatu-nu-shu, uni ga shimachi
「唐鳩の且那々々、鬼ケ島へ

tai kurabi shingya ikaji na."
力競べしに行かじな。」

"Mêshi wa kadashi ga ashi nu nâ dana,
「朝飯は食つたが晝飯がないので

chigusu mati Ikaramu."
血糞をたれて行かれぬ。」

"Mâ kara wâ ga nagamuchi mu iyu mu mê mu
「此處から自分が長餅も魚も飯も

muchi akyumu," diicha tu, "gâ ariwa iji shimimu."
持つて歩く」と言つたら、「それなれば行つても良ろしい。」

"Mêshi wa kadashiga ashi ı u nâdana,
「朝飯は食つたが晝飯がないので、

chigusu mati ikaramu."
血糞されて行かれぬ。」

"Mâ ni waga nagamuchi mu iyu mu
「自分は此處に長餅も魚も

mê mu muchi akyumu." "Gâri wa iji shimimu."
飯も持つてゐる。「それなれば行つても良ろしい。」

Nâ 6nin chiriti, Mikkuraun-shu ga yâ iji,
その六人連れて、ミツクラ御主の家へ行つて、

Yangute-nu-shû wa jô ni tatiti,
ことひ牛の旦那は門に立て

Karabâtu-nu-shû wa hamadurume ni yishiti,
唐鳩の旦那は籠の前に坐らせ、

Mukajinu-shû wa nubu nu yii ni fôchi,
百足の旦那は柄杓の柄に倒はせ、

Unagi-nu-shû wa amadai ishi ni fôchi, yanjichi-nu-shû wa
鰻の旦那は雨滴石に倒はせ、さい槌の旦那は

hitaba nu ui ni kwachi, nâdu wa têshi kara haikudi,
戸口の桁の上に差して、自分は上座から座敷に上り込んで、

"Mikkura-un-shû mikkura-un-shû, machi irii." dichi
「ミツクラ御主々々、火を入れよ」と言つて

tabakubun kachi kachi shâtu,
煙草盆をカチ々々言はせたら

Mikkura-un-shu wa hamaduru mê ji,
御主は籠の前へ行つて、

chigusu mati ikaramu." "Ma ni waga nagamuchi mu,
血糞たれて行かれぬ。」「此處に自分は長餅も

iyu mu mê mu muchi akyu mu." "Gâri wa iji shimimu."
魚も飯も持つてゐる。「それなれば行つても良ろしい。」

Nâ yutai ikyutankya, Yanjichi-nu-shû ga,
四人連れて行きをつたら、さい槌の旦那が

abushini shûtatu, "Yanjichi-nu-shû yanjichi-nu-shû,
〔田の畔で〕畔堅めをしてゐたので、「さい槌の旦那々々、

uniga shima chi tai kurabi shingya ikaji na,"
鬼ケ島へ力競べしに行かじな。」

"Mêshi wa kadashiga ashi nu nâdana,
「朝飯は食つたが晝飯がないので、

chigusu mati ikaramu."
血糞たれて行かれぬ。」

"Mâ ni waga nagamuchi mu iyu mu
「此處に自分は長餅も魚も

mê mu muchi akyumu." "Gâri wa iji shimi mu."
飯も持つてゐる。「そんなら行つても良ろしい」——。

Nâ 5nin ikyutankya Yangute-nu-shû ga,
五人連れて行きをつたらことひ牛の旦那が、

mukô ka ra, bura pûpu fuchi kyûtatu,
向ふから、法螺貝をプープ鳴らしながら來をつたので、

"Yangutenu-shû yangutenu-shû, uniga shima chi
「ことひ牛の旦那々々、鬼ケ島へ

tai kurabi shingya ikaji na."
力競べしに行かじな。」

machi irirandi ijankya, karabâtu-nu-shû ga
火を入れやうと行つたら、唐鳩の旦那が

hani batabata tatachankya, mii gami hê chikankumati,
翼をバタ々々させたので、眼いつぱいに灰をぶち込まれて、

abatiti nubu tuti mii aron-di shanka,
あはてゝ柄杓を取つて眼を洗はうとしたら、

Mukaji-nu-shû ni tii kuikiyati,
百足の旦那に手を噛まれ、

urikara tiishi chi hingiti ijankya, Unagi-nu-shû
それから座敷へ逃げ上つて行つたら、鰻の旦那を

kun naburumikachi, tataki mangeti unu mâ ni,
踏み辷らかして、たゝき倒れてゐるその間に、

uikara yanjichi-nu-shû nu utiti kichi hushibuni
上からさい槌の旦那が落ちて來て背骨を

chikiurati, urikara abatiti uiiti jô chi hingitankya
折られ、それからあはてゝ起きて門の處へ逃げ出したら

yangute-nu-shû ni chikkurusati, shijammun di. Tûsa.
ことひ牛の旦那に突き殺されて、死んで了つたと。トーサ。

六月十二日平氏

▷ホーラヌハーヤ又はホーラヌマーヤは河原の大姉さんの意と言はれる。然してホーラヌハーヤといふ言葉は昔話といふ意にさへ用ひられる程通つた話になつてゐる。

五二　ホーラのマーヤ　其二

川の上のマーヤ(hôru uinu mâya)、彼女が川原で着物を洗ひ居つたら、川上から桃が流れて來て、それを拾つて來て、うちで植ゑて

明日は生えよ
あさては成れよ
明後日は熟めよ

と言つたら、只今生えて實が成つて、明後日は熟んだので、摘らうとしたが摘られないので、木の下に坐つて泣いてゐると、美しい若い姉さんが來て、「どうしたマーヤ泣いてゐる」。「桃が摘られないので泣いてゐる、」「では私と摘り分けしませう。」「良ろしい」——。籠を二つ持たして摘らしたら、自分の分は底には熟み桃入れて、うはべには青桃ちよいと着せて、マーヤが分は底には青桃ばかり入れて、うはべには熟み桃をちよいと着せて、さうしてマーヤに渡したら、マーヤは桃が食べられず、又泣いてゐたら齡な爺さんが、「どうしたマーヤ、お前は泣いてゐる」。「美しい若姉さんと、桃をもり分けしたら、私の分は青桃ばかり入れて、自分の分は熟み桃ばかり入

れて、持つて行つて、私は桃が食べられないので、泣いてゐます。」「そんな悪い事をする者があるものではない。その名は何と言ふのだ、連れて來てお前に返させよう。」「名を知りませんからもう良いです、私は損をして居りませう。」「そんなら此處にお金が十圓あるから、これを上げよう、精々働くが良いよ、あんな者が又廻つて來る事があるかも知れない、その時に罰當てよう。」さう言つて別れた。

（六月九日　差司氏）

五三　ホーラのマーヤ　其三

「フォーラのフーアヤ（川原の大姉さん）が」と話し出すと、「ハイ」と返事をしながら聞くものです。川でカーム（腰卷）を洗つてゐたら、上から桃が澤山流れて來て、それを拾つて爺さんと婆さんの爲には、籠の底には青桃ばかり入れて、うはべには熟み桃を少し入れ、自分の爲には底には熟み桃ばかり入れて上には青物を少し入れ、うちへ歸つて爺さんと婆さんに上げたら、「ファーヤ〳〵、爺さんと婆さんのものは青物ばかり、お前の分は熟み桃ばかり入れたね」と言ふので、「爺さん婆さん、私は熟み桃ばかり貰ひましたが、それを植ゑて澤山實を成らして、爺さん婆さんにうんと上げるつもりだつたのですよ」と言つたとさ。此の話が、學校の桃太郎になつたのださうですね。

（五月二十九日夜　村山氏）

五四　バシャフクジン

トーミルクジマのバシャフクジンオイフクジンは大分限であつたが、或る歳の夜貧しい者達が米を貸してくれと言ふと、「お前達に貸した處で貸し聲は聞かれるが戻し聲は聞かれぬ。庭の隅に籾の皮があるから、それでも持つて行つて食へ」と言ふ。味噌を貸してくれといふと、庭の芭蕉糞を持つて行つて食へと言ふ。

難儀な者達が正月元旦の日大北の廣原（unishin tôbaru）でミシュリ涙（意不明）を落し乍ら、「さア畑を打つて働いて食べよう」とて働いてゐると、テダ雲上加那志（太陽神）が降りて來られて、「どうしてお前等は元日に仕事をしてゐる」と言はれる。「バシャフクジンオイフクジンに米味噌を借りて正月をしようと思ひましたが、貸してくれませんので斯く働いて居ります」と言ふと、神樣は「では自分と一緒に來い」と言はれ、バジャフクジンオイフクジンの家へ行かれた。「バシャフクジンオイフクジンは誰が長者にしたか、」「私は私の手足が達者だから長者になりました。」「お前はもつと物持になり度いか、」「なり度い處ではありません。」「どんな物が欲しい

か。」「アンブキキンブキのオーキ(家)が欲しいと思ひます、」「ではそれを上げよう」――。神様は杖で彼を打つた。一つ打つたら脊骨を打出し(尻尾になる)、二つ打つたらアシチマグ(足爪)を打出し、三つ打つたら豚になつた。

神様は皆に言はれた。彼を石マキ(豚小屋)に入れて人間の食ひ残しを與へ、人間のミーシキハナシキ(病氣)の時は、彼を殺して人間のドゥッシュミッシュ(身代り)にせよ」――と。

(六月二日　平氏)

類話　別の話では、バシヤフクジンと言ふ人は非常に慾が強く、自分の物と人の物との區別もつかない程であつた。それで皆にさん〳〵叩かれて豚になつたと簡單に語られる。(五月十九日　出家池榮老)

五五　神様と女

ススヤマ坊主といふ神様が、人間の心を試さうと方々を歩かれた。歩いてゐるうちに、一人の女が火を燃してゐる家へ來られた。「喉が渴いてゐるから、湯でも飲ましてくれぬか」と言ふと、女は天水(tinto-mizu)で茶を沸かして、取持をした。「此處にはカワ(井戸)はないのか、」「カワがないので、天水を使つて居ります。」「では此の屋敷内にカワを拵へて上げよう。」神様が屋敷の隅に杖を立てたら、そこに井戸が出來た。

それから廻つて行かれると、又煮物をしてゐる女の家へ行かれた。「鍋の中の物は何だ、」「田芋です。」「自分は腹が減つてゐるが、少し食べさせて呉れぬか、」「上げませう。」女は口では上げると言ひながら、仲々上げない。「まだ煮えないのか、」「まだ煮えません。」幾度も問答があり、最後に神様が、「その芋は煮えない芋だな」と言はれると、鍋の中の物はユゴバシャ(食はず芋)になつて了つた。それを屋敷の隅に捨てたら、芽を出してだん〳〵繁殖した。

其處から又先へ廻つて行かれると、美しい女が機を織つてゐる家へ來られた。「姉さん〳〵、方方歩き廻つてゐると水欲しくなり湯欲しくなる、湯を一杯飲ましてくれないか」と言はれると、女は、「自分は正月の着物を織つてゐるから機を下りる暇などない」と言ふ。神様は門の處まで出て來られたが、懐中から絹絲を出して門前に捨てゝ、「姉さん〳〵、此處に絹絲が落ちてゐるが、お前の物ではないか」と言ふと、女は出て來て、「これは自分の物だが、子供達が持遊んで捨てたのであらう」と言つて、それをふところに入れた。神様は直ちにその女をオイシャ(鼠)にした。オイシャは床下へ入つて了つた。

言葉に錢金はかゝらぬ。良い挨拶をするものだ。

(六月十二日　平氏)

五六　歌ひ骸骨

或る人が、例へば此處から大山(山の名)を越えて田皆へ行く途中、山の中で泥棒に殺されて金を取られた。泥棒は翌年の三月頃又此の山道を通つた。處が草原に轉がつてゐるチブル（骸骨）が、ションガ節といふ歌を節面白く歌つてゐるので、泥棒はその骸骨に向つて、「お前は如何にも面白くションガ節を歌ふが、一つ天下(殿様)の前で歌つてくれぬか」と言ふと、骸骨は、「歌ひませう」といふ。それで泥棒はその骸骨を携へて天下様の處へ行つた。「天下様天下様、骸骨がションガ節を歌ひます」といふと、天下様は骸骨が歌ふものかと言つて承知されない。「では歌ふか歌はないか賭をしませう、歌つたら天下は私の物、歌はなかつたら私の首は立所に差上げます」といふ事になつて、泥棒が骸骨を取り出して、「サ今歌へ(sa nama utore)」と言つたが、骸骨は一向歌はない。泥棒は賭の通り殿様に首を取られた。其時始めて骸骨が口を利いた。「天下様天下様、去年實は斯々」と言つて、自分の殺された話をして、今その仇を討つたのですと語つて、ションガ節を面白く歌つた。天下様はその骸骨を床の前に飾つて拜んで、さうして時々ションガ節を歌はせたといふ事である。

（六月十二日　平氏）

五七　兄　弟（梗概）

昔大和のケイガ寺といふ寺に、ウミマチ、フミマチといふ兄弟が修業をしてゐた。何をさせても良く出來て、坊様のお氣に入りであつた。或る夜、御生の國のクラヤマサンの寺から使ひが來て、ケイガ寺の坊様に向つて、あなたのお寺には八人の弟子があるといふ事だが、その中の二人丈讓つてくれぬかといふのである。坊様が弟子達に話すと、ウミマチ、フミマチの二人が行き度いと言ふ。二人は使ひの者と御生へ行つた。

ウミマチ、フミマチは御生で三年の間修業をして歸つて來た。親達は丁度三年忌の祭をしてゐたが、無事に歸つて來たので喜んで生き祝ひをした。兄弟は御馳走を食べてから、今度は私達が御馳走を出しませうと言つて、アヲの山へ行つて鳥を射て歸つて、皆に御馳走をした。

二人の叔父は悪い人であつた。何とかして甥共を亡き者にして、その財産を取らうと天下様に告げ口をした。「ウミマチ、フミマチは天下様を殺して、自分等が天下にならうとしてゐます」――。それを聞いて天下様は怒つて、御馳走をするからとて二人を或る濱へ呼んで、弓鐵砲で二人を殺さうとしたが、二人は御生で習つて來た闇の手で世の中を眞暗にした。天下様の兵隊は味方

討をして皆死んだので、今度はキシの手で大川を出してその死骸を海へ流した。

天下様の兵隊を殺したので、二人は書置をして腹を切つて死んだ。天下様はその書置を見て事の次第を知り、惡い者を成敗し、ウミマチ、フミマチの二親に澤山のお金を下さつた。

（六月十二日　平氏）

五八　三人兄弟（梗概）

兄弟三人あつた。親は三人の子供を偉くしようと思つて、學校へ出したが、三人共學校へは行かず、野原で遊んでばかりゐる。親はそれとも知らず、子供達が歸つて來ると、よく勉强して來たと言つて御馳走を造つて食べさせてゐる。が讀み書きさせて見るといつまでも何も出來ない。親も呆れて、「お前達は落てちぬくまぐま落ちて行け」と言つて、いくらかの金を與へて家を出してやつた。

三人が何處へといふ宛もなく行くと、三つ道の處へ出た。其處で兄が、自分は上の兄であるから上の道を行かうと言ふと、中の兄は自分は中の道を行かうと言ひ、下の弟は下の道を行かうと言ふ。「では行く事にしよう、今から何年目の何月何日には皆戻つて來て、此處で集る事にしよう」——。さう言つて三人は自分々々の道を先へ行つた。

行くうちに兄は弓の名人に逢つて、弓の稽古をした。中の兄はヒョード（易）の名人に逢つて、易の稽古をした。末の弟は盗みの名人に逢つて、盗みの稽古をした。さうしていよ〳〵約束の日が來たので、三つの道の處に集つた。一番先に兄が、次に中がやつて來て、末の弟は夕方になつてノソ〳〵やつて來た。兄が中に、「お前は何の仕事を稽古したか」と訊くと、「自分は易の稽古をした」と言ひ、末に訊くと、「自分は盗みの手を習つた」といふ。そこで兄は、「自分は弓の稽古をしたが、此處で一つ業競べをしてみよう。あの松の木の鳥の巣に、卵が幾つあるか易で宛てゝ見よ」と言ふと、中は直ちに二つあると答へた。「それなら其の卵を、親鳥に氣付かれぬ樣に盗んで見よ」と言ふと、末は頭を下に足を上にスル〳〵と木を登つて、雜作なく取つて來た。「さアその卵を向ふに並べよ。」並べさせて兄は一つの弓でその卵二つを射抜いた。

それから後三人は或る金持と賭をして、金持が嚴重に番人をつけて見張つてゐる金箱を盗み取り、其金で樂な暮しをすることが出來たといふ。

（六月十二日　平氏）

tsukinu hata tidanu hata nu kura kêti, subanu buchi,
〔馬には〕月の型太陽の型の鞍をかけ、スバの鞭〔を持つて〕

"sâ mâ mâ kibariyô, ura ga Nafa nu ôganashi ga yâ iji
さア馬々氣張れよ、汝が那覇の王加那志の家へ行つて

kiiseka shiriya, waga tuku nu me ni
來さへすれば、吾床の前に

hami fugaminu gani fugamundô" di
神を拜むやうに、〔お前を〕拜むよ」と言つて

hitubuchi kêtankya sugu Nafa nu ôganashi ga
一鞭かけたら、直ぐ那覇の王樣の

yâ nu tsukiyama ji tatchi, mata hitubuchi kêtankya,
館の庭の築山に立つて、又一鞭かけたら、

ôganashi nu lrimawai nu miyâ mimoro.
王樣の館の一里廻りの庭を三度駈け巡つた。

Tamanu-Mishudainu-unagu wa, "wakya uma du
玉のミシヨダイの女子は、「吾等の馬こそ

faimâ daradi shiriwa, wakya mâ yukwa mu fainu
奔馬だと思つてゐたら、吾等の馬よりも馳る

mâ nu uri ba na." dichi, fikijô nubyagati
馬がゐたものか」と言つて、玄關から身を出して〔ゐるのを〕

Kiichadun ga mâ nu uichi chikadi nushiti,
キーチヤ殿が馬の上へ摑んで乘せて、

yâ nu ushu ijingya, "ura wâ tuji nati shimin nya"
家の裏へ行つて、「お前は自分の妻になつて良いだらう」

dichi, gasa ichi, finto mu shimiran gane,
と言つて、それ丈言つて、返答もさせずに

59 Kiicha-dun nu fanashi

Yunubiagari-nu-Kiichadun-Haitamagusuku ga
ユヌビアガリのキーチヤ殿ハイタマグスクが

kyurayingwa yati, Yamatu nu kuni ni wa,
美男子で、大和の國には

uri ga tuji naisunenu unagu nu uradana,
彼が妻にふさう女がゐないので、

Nafa nu Osama nu kwâ nu Tamanu-Mishodainu-unagu
那覇の王樣の娘の玉のミシヨダイのウナグ

du urifudu kyurasam mundi iyuru, uri iji
こそ彼に劣らぬ美しい女だといふ。——その女を、行つて

tuji nasanya naran di umuti, 100 nu uma kara 50 iradi,
妻にせにやならんと思つて、百の馬から五十選んで、

50 nu uma kara 30 iradi, 30 nu uma kara 10 iradi,
五十の馬から三十選んで、三十の馬から十選んで、

10 nu uma kara 5 iradi, 5 nu uma kara 1 iradi,
十の馬から五つ選んで、五つの馬から一つ選んで、

Ashigaru-gukâru-chimabuta-chimaguru
アシガルグカールチマブタチマグル〔と言ふ馬を選び出した〕。

Uri kara ichu-isho kichi, dagumuchi nu
それから〔身には〕絲衣裳着けて、ダグムチの

firuubi fikimawachi, tidafiruban nu ôgi sachi,
廣帶引廻し、テイダヒルバンの扇差し、

garashiban nu ashida kudi, indô kinshaku saginamiti,
ガラシバンの足駄穿き、印籠巾着下げなめて、

Muduti ijankya, tuji wa,
〔キーチヤ殿が〕戻つて行つたら、妻は

"Nû hini yati yo yakumii," dichatu,
「何の船でしたか役目」と訊くので、

"ikusanii yatamu, lssô ga me nu chû wa tadaima
「戰さ船だつた。一艘の人はたゞいま

kirikuruchashi ga, muduti fun di shunu tuki,
斬り殺したが、戻つて來ようとする時、

makigata yûti kurufigi yutaramikachunu
卷形結ふて黑髯よたらめかした

wakanise nu ijiti kichi, uritu tatakôti du uma du nataru."
若者が出て來たので、それと戰こうてゞ今までかゝつた。」

'Satimu yakumi yakumi, uri wa wâ chuinkya nu
「さても役目々々、それは吾たつた一人の

yii-ganashi yatanu mun, uri ga uran nati kara
兄加那志だつたものを——、彼が居なくなつて

waga utante, nû shui yo," dichi
私は生きてゐて何としよう」と言つて

shigu myâ nu chinkyô chi tunja tu,
直ぐ庭の井戸に飛び込んで了つたので、

"chô shimota" dichi, Kiicha-dun ga
「ちョう失敗つた——」と言つて、キーチヤ殿が

chinkyô chi tubi uriti
井戸に降りて〔妻を引上げたら、息が切れてゐた〕。

Uri fiki agiti, sakataru ni sakashu shi munkudi kara,
それを引上げて、酒樽に酒鹽してもみ込んでから、

sugu Yamatu nu kuni chi tsuriti muduti kichi,
直ぐ大和の國へ連れて戻つて來て、

nate tujiutu nati kurashi shi utankya,
二人夫婦になつて暮しをしてゐたら、

mikkami ni hini nu kichamu.
三日目に船がやつて來た。

"Yakume yakume, ama kara hini nu kicha shi ga,
「役目々々（夫を呼ぶ語）、向ふから船が來ましたが、

ari ikusa nii ya anan ka ya."
あれは戰さ船ではありませんか。」

Kiichadun ga iji michatu ikusabuni yati,
キーチヤ殿が行つて見たら戰さ船で、

unu hini issô game nu chû wa tadaima furuchashi ga,
その船一艘の者はたゞ今殺したが、

muduti fun di shunu tuki, makigata yûti
戻つて來ようとする時、卷形結ふて（髮の形）

kurufigi yutara mikachunu wakanise nu,
黑髯よたらめかした若者が、

"ura wâ wunai tatakôtinge turashun du,
「汝は吾妹を戰こうて返へすか、

tada turashun du" di ichamu.
たゞで返すか」と言うた。

"Yingwa nu tatakôti du turashuru, tada turashun nya."
「男が戰こうてゞ返へす、たゞ返すものか。」

Gan ichi yuru firu nanka tatakoti,
さう言つて二人は夜晝七日戰つて〔若者の首を取つた〕、

"Burifushi burifushi, Tamanu-mishudainu unagu
群星々々、玉のミシヨダイの女子は

miyajina." Tûtan tuki niwa, "nâni wa mugimaki nu
見やじな。」問ふた處が、「自分は麥播きが

usunati miyamu, atu kara mitsubushi nu kyûndô,
遲くなつて見なかつた。後から三つ星が來る。

uri chi tûti mi."
あれに問うてみ。」

Mata ikukai ijankya michibushi ikyati.
また行くかい行つたら、三つ星に行逢ふたよ、

urichi tôtan tukuruga, nâni wa taui nu usu nati miyamu,
それに問ふた處が、「自分は田植が遲くなつて見なかつた。

atu kara yuakibushi nu kyûn dô, urichi tûti mi,"
後から夜明け星が來るよ、あれに尋ねてみ」〔といふ。〕

mata ikukai ikyutan tuki ni wa, yuakibushi ikiôti,
また行くかい行つたら夜明星に行逢ふた。

urichi tôtan tukuru ga, "michamu, ura ga
それに尋ねた處が、「見た見た、お前が

mâkará ikutu wa, fûtô nu mannaka ni
此處から行くと大原の眞中に〔池があつて〕

ippun matsugi nu antuni,
〔其端に〕一本松木があるから、

urini mâ kuichi, ura du wa unu matsugi ni nubuti urutu,
それに馬を繋いで、お前は其松木に登つて居れば、

akaushi nu kichi mizu nudi, hanakiriushi nu kichi
赤牛が來て水を飲み、鼻切れ牛が來て

"sâ yukwa chû nu tamashi wa
「さア良か人間の魂は

tin chi agayunu mun di iyuru," dichi,
天に上るといふものだ」と言つて、

mata mutu nu uma ni mutu nu shitaku shi.
また元の馬に元の仕度をして、

nigirimishi miitsu tamutu ni iriti,
握り飯三つ袂に入れて、

"sâ mâ mâ kibari yo, uraga tin iji kiseka shiri ya,
「さア馬々氣張れよ、お前が天に行つて歸つてさへ來れば、

waga tuku nu me ni hami fugaminu gani fugamundô,"
吾床の前に拜んでゐる神のごとお前を拜むよ」

dichi, suba nu buchi ibuchi kakitankya, tin nu
と言つて、スバの鞭一鞭かけたら、天の

shirukumu kâti, mânti uma ni nigirimishi kamachi
白雲にかゝつた。其處で馬に握り飯を食はせて

chikara shimiti, nâ ibuchi kakitankya
力をつけて、今一鞭かけたら、

tin nu nakaba kâti, mânti uma ni nigirimishi kamachi
天の半ばにかゝつた。其處で馬に握り飯一つ食はせて

chikara shimiti, nâ ibudhi kakitankya tin nu myâ agati,
力をつけて、又一鞭かたら天の庭に上つて、

mânti uma ni nigirimishi kamachi chikara shimiti,
其處で馬に握り飯を食はせて力をつけて、

urikara ikukai ikyutan tuki niwa, burifushi michi ni ikyoti.
それから行くかい行きをつたら、ブレ星(六つ星)道に行逢ふた。

matsugi kara uriti, uriyutankya,
松木から下りて、——下り居つたら、

Mishudai-unagu mu, shôji shingya ikyu ni wa
ミショダイ女子も、精進しに行つた時には

unu uma miya dana atanumunu, mudui ni wa
その馬を見ずあつたもの、歸る時には

unu uma michi, "furit, Yamatu nu Kiicha-dun nu
その馬を見て、「おうこれぞ大和のキーチヤ殿の

uma yashi ga, ikyashi uma chi kicha ga ya,"
馬であるが、どうして此處へ來たのであらう」

di umuti, uma nu kubi dakichikiti nâda shitashita
と思つて馬の頸を抱きつけて、涙シタシタと

utuchi nakyutan kya, Kiicha-dun mu
落して泣きをつたら、キーチヤ殿も

nachikaku natara yo, nâda nu utiti
懷ちかくなたらよ〔懷かしくなつたのだらうよ〕、涙が落ちて

Mishudainu-unagu nu uichi, nâda nu utitankya,
ミショダイ女子の上に涙がかゝつたら、

"annu hingi-duri ya chû nu ui chi shibai shi,"
「そこな迷ひ鳥は、人の上に小便をして」

di iyunu mâ ni wa, Kiicha-dun mu uriti kichi,
と女が言ふ間に、キーチヤ殿も下りて來て、

"niga nata mâchi menshôcharu," di ichatu,
「どうしてあなたは此處へ來られました」と言つたら、

"wana ura sôingya du kichashiga, ura ningin chi
「自分はお前を迎へに來たのだが、お前は人間に

mizu nudi, 7nin zuri nu kichi shôji shi,
水を飲み、七人連れが來て精進(みそぎ)し、

5nin zuri nu kichi shôji shi, 3nin zuri nu kichi
五人連れが來て精進し、三人連れが來て

shôji shushiga, unu uchi kara chui wa
精進するが、その中の一人は

Tamanu-mishudainu-unagu dô," dichi hatatamu.
玉のミショダイの女子であるよ」と敎へた。

Nihedero, dichi ikukai ijankya, fûtô nu manna ni
有難う、と言つて行くかい行つたら、大きな原の眞中に

matsugi nu ati, uri ni uma kuichi dû wa nubuti utatu,
松木があつて、それに馬を繫いで自分は木の上に登つてゐたら、

akaushi nu kichi mizu numi, hanakiriushi nu kichi
赤牛が來て水を飲み、鼻切れ牛が來て

mizu numi, 7nin zuri nu kichi shôji shi,
水を飲み、七人連れが來て精進し、

5nin zuri nu kichi shôji shimu,
五人連れが來て精進しても、

Tamanu-mishudainu-unagu yashiga di
玉のミショダイの女子だと

mii nu munu wa uradana, 3nin zuri nu kichi
思はれる者はゐないので——、三人連れが來て

shôji shâtu, anu mannaka ra akyus-hi wa
精進したら、あの眞中から歩くのは

Tamanu-mishudai-unagu yashiga di umuti,
玉のミショダイの女子だがと思つて、

mâ nu tunai ni ichikanê nu namayuta nu uti,
その隣に卑しいなまユタ(新米のユタ)があつて、

urigadi du fusuku yantuni urini gadi fana
その一人丈が不足だつたから、それにまでハナを

shiirachi miya dichi, uri ni shimitan kya,
させてみやうとて、それにさせたら、

"jô niti yamatu nu Kiicha-dun dinu mun nu,
「門前に大和のキーチヤ殿といふ者が

Tamanu-mishodainu-unagu sôti ikyun di,
玉のミシヨダイの女子を連れて行こうとて、

fiinu mun kiyôtutî du ukya kwâ wa
火の物を嫌つてゐる爲にこそ、あなたの子は

hii nu hariyun gane hariyun dô," dichi ichatu,
木の枯れるがに枯れるのである」と言ふたので、

"gan yariwa mâchi hû shiri," dichi abiti,
「では此處へ呼べよ」とて呼んで、

"ura Tamanu-mishodainu-unagu sôti ikibushankya
「お前は玉のミシヨダイの女子を連れて行き度いなら

sôti ikiyô," dichi uchi kara habi tukuru
連れて行けよ」と言つて、内から紙袋を

tiichi muchi kichi turachi,
一つ持つて來て與へて、

"uri nidu Tamanu-mishodaiuu-unagu nu untuni,
「此れ〔此の中〕にこそ玉のミシヨダイの女子は居るから、

yâ ikun tani wa akiti minna yô,"
家へ歸りつくまでは開けて見るなよ」

muduinu shiyô naraji na," di chatû,
戻る事は出來ないか」、と言つたら、

"muduinu shiyô dikiyumu,"
「戻る仕樣が出來ます」

"ikya shiri wa dikiyui yo,"
「どうすれば出來るか」

"nâni wa gushô nu andanu-ô nu tuji nayunu
「自分は後生のアンダの王〔の息子〕の嫁になる

gii shâshi ga, mâ nu jô kichi yuru firu 7ka
約束をしたが、あなたが王の門前に來て夜晝七日

finumunu kiyôrewa, ningin chi mudurayumu."
火の物嫌へば、人間に戻られます。」

"Uriwa yashi kutu deru," dichi mânu jô ji
「それは易い事だ」と言つて、その門前で

fii nu mun kiyôtan tuki ni wa,
〔七日の間〕火の物を嫌つた處が、

Mishodainu-unagu nu utu nayunu gii shânu yingwa wa,
ミシヨダイ女子の夫になる約束をした男は、

hii nu hariyun gani hariti, shimajima nu yutayuta
木の枯れるがに〔身體が〕枯れて、島々のユタユタ

kuniguni nu yutayuta hana shiirachi mu,
國々のユタユタを呼んでハナ(米占)をさせたが、

chui mu uri âshunu mun nu uradana,
一人もそれを解く者がないので、

"nâ uda nimu yuta wa uranka yâ," di kangetan kya,
「もう何處にもユタは居ないのか」と考へて見たら、

Kiicha-dun wa hôrashiku nati, mata mutu nu kutu shi,
キーチヤ殿は嬉しくなつて、また元の通りに、

tujiutu nati, namaga nama madi mu
夫婦になつて、今が今までも

yukwa kurashi shumu di. Gassa tusa.
良か暮しをしてゐると。ガツサトーサ。

（六月十二日　平氏）

▷人は死ぬると天の庭へ上るといふ信仰は、此の島では現に生きてゐる。死人があると幾日かの後ユタを招いて神下しの儀を行ひ、死者の靈を一旦家族か近親の女に乘移らせ、その女が一定期間山の水で精進をすると、死者ははじめて天の庭へ上る事が出來るといふ。

此の話の標題は「庭の天」としたが、話者は Kiicha-dun un fanashi, 即ちキーチヤ殿の話と呼んでゐられた。

dichi mutachanu munga,
と言つて、持たしたものゝ、

mâ nu unu tukurun tani chu mataradana,
〔キーチヤ殿は〕馬の居る處までも待ち切れず、

sugu akiti michankya urikara ôbe nu tudi,
いきなり〔袋を〕あけて見たら、中から青蠅が飛んで、

'Chô shimota, aridu Tamanu-mishodainu-unagu
「ちヨう失敗つた。あれぞ玉のミシヨダイの女子

yatanu mun, nâ shikata nu annya." dichi,
だつたものを、もう仕方があるか」と言つて、

mâ nu nii chi iji, "sâ mâ kibari yo,
馬の處へ行つて「さア馬々氣張れよ、

mata mutu nu Yamatu nu kuni chi ikiwa du nayun dô,"
また元の大和の國へ行くのだよ」

dichi suba nu buchi hitubuchi kakitankya,
と言つて、スバの鞭一鞭かけたら

shâ chi wa yasa atara yo, sugu nâdu nu
下りは安かつたのだらうよ、直ぐ自分の〔家の〕

tsukiyama ji tachamu.
築山に立つた。

Kya sakadaru ni munkumatu tanu
すると酒樽にもみ込まれてあつた

Mishodainu-unagu wa, sakadaru kara ijiti,
玉のミシヨダイの女子は、酒樽から出て、

nunu choncho choncho uyutam mundi,
布チヨンチヨチヨンチヨと織つてゐたといふのだ。

六〇　鬼の姉

昔大和に大村の殿(Omura-nu-tun)といふ殿様があつて、二人の子供があつた。上が女の子で下は男の子であつた。殿様は姉を大事にして、夜は七小座八小座に籠めて(nanahucha yahucha ni humitiy)、男の子と一緒に寢かせた。男の子が七つになつた時である。毎晩十二時頃になると姉は小座を出て行き〳〵して、歸つて來ると生臭いにほひ(ôhaja)をプン〳〵させるので、これは不思議ちやと思つて、或夜姉が拔け出して行つた後を尾けて行つて見た。處が姉は厩から馬を引出して築山へ行つて、其處で馬を殺してガリ〳〵と喰ふのである。「あれ、吾姉は鬼ぞあればな(abe wakya ayawa unidu aribana)。」弟が驚いて急いで小座へ戻つて寢てゐると、やがて姉は又生臭いにほひをさせて歸つて來た。弟は翌る朝早く、父と母に對つて、「あれ(彼女)は昨夜築山で馬を殺して喰つてゐました。あれは後は鬼になりますから、今のうちに何とかするが良くはないでせうか」と言ふと、父は怒つて、「姉がそんな事をする筈はない。良い夫を捜して歩いてゐるのだ。お前こそ其樣な事を言ふなら、落てらぬくま〳〵落ちて行くが良い」と言ふ。「はい行つても良いです(ô iji shimabumu)」——。弟は澤山の馬から良い馬を五十疋選び、五十疋の中から三十疋選び、三十疋の中から十疋選び、十疋の中から五疋選び、五疋の中から一疋選んだら、アシガルコカールチマブタチマグルといふ立派な馬が選び出された。その馬に月の型陽の型の鞍を置き、身には絲衣裳(絹の衣裳)を着け、ダクムチの廣帶を引廻し、テダヒルバンの扇を差し、ガラシバンの足駄を穿いて、馬に乘つて家を出た。家を出て何處といふ宛もなく行き居つたら、大きい原の中で鬼と虎と盗賊が、一疋のことひ牛を眞中にして爭つてゐたが、子供の姿を見るや先づ鬼が立出でゝ、「良い生捕りが來た、もう牛など無用だ、此の子供を喰つてやらう」と言ふ。すると今度は盗賊が立出でゝ、「いや子供を喰つてはいけない、彼れは此の牛を殺して我等三人に喰はして呉れるだらうから、さあ子供早く此の牛を殺して三人に喰はしてくれ」といふので、子供は、「牛を殺してお前等に喰はせるは易い事」と言ふや、只今牛を殺したら、鬼は「俺は肉を喰ふ」と言ひ、盗賊は「俺は骨を喰ふ」と言ひ、虎は「俺は內臟を喰ふ」と言ふので、子供は三人に好みのものを分けて與へた。それを喰つて了ふと今度は虎が立つて、「旦那々々、馬を捨てゝ私に鞍をかけて乘つて下さい」と言ふ。子供は馬の鞍を虎にかけて、その虎に乘つてカガの殿樣の館の前へ來た。

（七釜の飯炊きの條は灰坊の話と略〻同樣であるから梗概を記すに止める。）子供がカガの殿樣

の館の前へ來ると齡な爺さんと婆さんがゐるので、世話をして貰つて殿樣の家の草刈りになる。子供は雇はれる時、美しい着物は爺さんの家に預け、虎は竹山に放し、身には爺さんに貰つた破れ着物を着て行く。最初草刈りに行くが、手を切つて草刈りが出來ず、七人でする庭掃きをさせて貰ふが、又足の先ばかり掃き切つて動まらず、今度は七人でする釜焚になると、飯が早く炊けて主人に重寶がられる。毎日釜を焚いて灰の上に轉がつてゐるので、皆にヘーボと呼ばれる。そのうちに芝居があり、殿樣は家人を連れて見物に行く。ヘーボは豫め風呂の湯の初を取つてあつて、自分はそれで浴びて、爺さんに預けてある着物を着け、虎に乘つて芝居の場を飛び廻り、神の天降だと騷がれ、暗の手を出してあたりを大暗闇にして、その中を歸つて來る。翌日も殿樣は芝居に行く。ヘーボは出かける時その娘に見破られ、今度は二人で虎に乘り芝居の場を飛び廻る。歸つて來て娘は腹が痛むと騷ぎ、村々の巫女を賴んで占つて貰ふが解く者がなく、最後に一人の貧弱な巫女が、例の盃事をすゝめる。灰坊は自分の出る番になると、風呂を浴びて主人が借してくれた着物を肌拭きにし、例の仕度をして出る。さうして目出度殿樣の聟になる。

二夫婦になつて暮してゐるうちに、父も母も亡くなり、七、八年も過ぎた。彼は島の俤が立つて

(故郷戀くなり)。妻に對つて、「自分は故郷が見度くなつたから、暫く行つて來よう」と言ふと、妻は、「そんなら虎に乘つて行つたが良いでせう」と言ふ。「いや虎に乘つて行く程の事はない。お前は毎日虎の見廻りをしてゐて、若し虎が暴れる時はその綱を切つて放てよ」と言つて、テダヒルバンの扇一つ持つて、鄕里へ行つて見たら、村はムラジマ(空村)になつてゐた。これはきつと自分の姉が鬼になつて、村人を皆喰つて了つた爲であらうと思つて歸らうとしたが、せめて吾家を一目見て行かうと思つて、家の側まで行くと、家から煙が立上つてゐて、姉は表の間でカーム(腰卷)の蚤を取つてゐる。「あれ姉はあんな姿になつたのか(abe ayawa agandu naturiba)」と思つて、今一目見て遁げ歸らうと、今一目見たら姉に見つけられてしまつた。「あゝ弟加那志々々、早く此處へ來なさい、見度い(會ひ度い)と思つてゐたのに見られたよ(miibusha atanu mun miyataribamu)。今茶を上げるから、お前は此處で此の太鼓を打ちながら火を見てゐて下さい。だが決して其處の鍋の蓋をあけて見てはいけませんよ。私は家の後で茶道具を洗つて來るから。」姉さんはさう言つて出て行つた。弟は仕方なく太鼓を打ちながら茶を湧かしてゐると、其處へ白い鼠(shuyômuru)が二疋出て來て、さても息子よ〳〵(sattimu kwakwa)、お前が言つた通りにすれば良かつたのに、姉を良い子〳〵してお前を落てらぬくま〳〵へ落してやつたば

かりに、私達は姉に喰はれてしまつて此の樣になつた。さア太鼓は私達が打つから、お前は早く逃げなさい」と言ふので、弟が一生懸命に遁げ出したら後から姉が追かけて來て、「吾が弟でも喰はずに置くか（wâ-dunu yiiganashi mu kamahu mungâ）」といふ。弟は今にも追付かれさうになつたので、傍にあつたミシュイの松（稀に見る素晴しい大松）に攀ぢ登つた。姉は、「お前がその木に登たんて（登つたとて）、遁がすものか」とて、田打鍬（tauchigui）のやうな齒をむき出して（makuujachi）、松の木に三度も突き立てたら、流石のミシュイの松の木もヨレ〳〵と倒れげく（げに）なつた。其處で弟がテダヒルバンの扇を出して、東方に向つて三度招いたら、虎が飛んで來て、忽ち鬼の姉を喰ひ殺してしまつた。それから弟は虎に乘つて妻の家へ還り、斯くて妻夫今が今までも良い暮しをして居る（anchi tuji-utu namaga namamadimu……）。トゥーサ。

（六月十二日　平氏）

類話一　タニヤマの國に鬼が來て毎晩牛馬が一疋づゝ喰はれ、最後に殿樣の乘り馬一疋殘された。今晩こそはその馬も喰はれて了ふに違ひない――と、殿樣の息子の虎千代樣は夜も眠らずに馬の見張をしてゐると、夜中頃に小座の側でガッシ〳〵といふ音がする。窃つと窺いてみると、自分の姉が鬼になつて砥に齒を研いでゐる處であつた。姉は齒を研ぐや厩へ行つて馬を殺して喰つて、水甕で口をゆすいで、自分の室へ行つて寢た。虎千代樣は夜の明けるも待ち切れず、二親を起してその事を話し、直ぐ姉を殺さなければならんと言ふが、却つて二親から、あんな立派な姉を殺すなどゝ言ふお前こそ此の家を出て行けと言はれ、家來の虎を連れて家を出る。

行くかい行くと野原に孕み馬が死んでゐて、犬と烏と蟻がその肉を奪ひ合つてゐる。虎千代樣は肉を切つて彼等に分け與へた。それから先へ行つて、小さい茶屋に泊めて貰ふ。

話は此處で甚だしく不明瞭になるが、兎に角或る立派な館に非常に美しい娘があつて、虎千代樣はその娘に手紙を書く。それをいつかの蟻と烏と犬が娘へ屆け、返事まで貰つて來る。返事には、自分の家の東の門には三十人の門番がゐるから通れない。西の門に布を下げて置くから、それをたぐつて石垣を上つて來いとある。虎千代樣はその通りして娘を忍び家人に知れるが、これは立派な男だとて聟に迎へられる。

以下鄕里を見舞に行き鬼の姉に追はれて遁げる條は全く標題の話に同じい。但し松の木に遁げ登つてゐるのを發見した鬼が、どうしてその木に登つたと訊くと、虎千代樣は頭を下に足を上に登つたといふ話し方が加はつてゐる。（五月二十二日　森山本東老）

類話二　或る分限が牛を十八疋飼つてゐたら、その息子の妻が鬼になつて毎晩牛を一疋づゝ食つた。息子がそれを知り、親に向つて妻を出さうと言ふと、あんな立派な妻に何を言ふかとて、却つて息子が家を出される。息子は遠い村で、夫に死なれて一人でゐる女の家に泊り、話が合つて夫婦になつた。それから故鄕を見舞に行くが、以下此の話も標題の話と殆ど變らない。（六月十日　差司氏）

六一　三枚のお札

一坊さんが三人の小僧に、明日は祝ひ日だから、山へ行つて山蕗を取つて來いといふ。三人は山へ行つたが、二人は淺山で早く取つて歸り、一人は深山で大きい珍らしい蕗を取らうと思つて山の奥へ入つて行くと、一軒の家があつて一人の爺さんがゐる。その家の周圍に大きな蕗が澤山ある。爺さん〳〵此の蕗を下さいと言ふと、爺さんはいくらでも持つて行くが良いが、お前は俺の小僧になつてくれぬかと言つて、大變な御馳走をする。小僧は御馳走された上澤山の蕗を貰つて歸る。

小僧は坊さんに次第を語つて、山坊主（話者は此處で此語を用ふ）の小僧になる事になつた。出かける事になると坊さんは小僧に三枚の紙袋を與へて、いざといふ時に使へと言ふ。山へ行つたら山坊主と思つたのは鬼であつた。夜になると鬼は、小僧を自分の脇に寢かせた。小僧は僞つて便所へ行き度いと言ふと、鬼は家の中に放れといふ。家の中に糞は放られぬから是非便所へやつてくれと言ふと、鬼は小僧の手首に綱をつけて遣つた。

小僧は綱を解いて、便所に例の紙袋を置いて遁げ出した。鬼は知らずに糞はまだかと度々訊く。その度紙袋がまだ〳〵と答へる。しまひに鬼は怒つて、頭から喰つてやらうと言つて便所へ行つて見たが右の始末なので、已れ小僧何處まで行くと言つて追かけて來た。今にも追ひつかれさうになつたので、小僧が紙袋を投げたら、二人の間に火の山が出來た。小僧はどん〳〵遁げる。火が消えると鬼は又追つて來て、小僧は追つかれさうになつた。又紙袋を投げると、今度は二人の間に大川が出來た。鬼は水に流され〳〵川を泳いで來る。小僧はその間にお寺へ遁げ込んだ。鬼も後から追ひかけて來て、坊主小僧を出せと言ふ。坊さんは怒つて、俺の小僧を騙かして何事だと言つて、鬼を豚のマキ（豚小屋）へ投込んで殺して了つた。

（六月十三日　平氏）

類話　別の話では山坊主は山婆となつてをり、小僧は三枚のお札を持つて山へ薪取に行つて山婆に摑まる。逃竄の條は同樣で、寺へ逃げ歸ると坊さんは小僧を長持の中に匿す。追ひ込んで來た山婆は坊さんに小僧を出せといひ、家搜しをしたが見當らないので歸らうとする時、門に仕かけた下げ鎗で刺殺されて了ふ。（森山老）

六二　一寸坊

齢な爺さんと婆さんがある。子供がないので、子供を授けて下さる樣にと寺々（神社の事にもtiraといふ事あり）を巡つて願をかけた處が、婆さんの膝に根太が出來てやがて其中から一寸坊が生れた。

一寸坊は利口で元氣者だつた。爺さんが野原へ仕事に行くと、いつも後から辨當を持つて行つた。或る日爺さんが原で仕事をしてゐると、馬に乘つた役人が二人通つて、爺さんに難題をかけた。自分達が用を濟ませて歸るまでに、鍬グル（鍬にて起される土塊か）を幾つ起したか數へて置けと言ふのである。爺さんは數へたが直ぐ間違へて了つて、心配してゐる處へ一寸坊が辨當を持つて來た。爺さんがその話をすると、そんな返答は雜作もない事だと言つて待つてゐるうちに、役人が歸つて來た。鍬グルは幾つあつたかと言ふので、一寸坊は反問して、あなた方の馬の蹄の音は幾つありましたかと言ふ。役人は返答に困つて、今度は一寸坊に餅を二つ與へ、それを兩手に一つ宛持つて、兩方交る〳〵續けて食へと言ふ。その通りすると、どちらの餅が美味かつたかと訊く。そこで一寸坊が兩手を叩いて、今どの手が鳴りましたかと言つたので、役人は負けて歸つて了つた。

一寸坊のお蔭で、爺さんは役人に斬られる處を助かり、三人は樂しみ話をしながら、今が今までも良い暮しをしてゐる。

（六月十三日　平氏）

六三　蛸取長者

アーガリと言ふ貧しい男が、毎日海で漁りをして暮してゐた。潮風に吹かれて髮が赤くなつてゐたので、人がアーガリ（赤髮の意かといふ）と呼んだ。

或る日立派な大家の娘がアーガリの家へ訪ねて來て、自分を妻にして呉れと言ふ。アーガリは自分を誑かしてそんな飛んでもない事を言ふのかと怒つたが、女がそれなら證據を見せようと言うたので、仕方なく妻にする約束をした。約束の日が來たので、アーガリは家を修理したり掃除をしたりして、女を嫁に迎へた。さうして齳て子供が出來た。

或る日夫婦は子供を連れて、女の親元へ先祖拜みに行つた。貧しい者の嫁になつたといふので女の父は怒つて會つてもくれなかつたが、母親は娘のことを心配して、重箱の底に小判を入れてその上に菓子を被せて、家苞（tsuite）に呉れた。家へ歸つてアーガリが苞をあけて菓子を取つた

ら底に小判が入つてゐたので、何だこんな物が入つてゐると言つて庭へ投げ捨てたら、妻が驚いて、これは此世の寶物である、何故庭へ捨てたりするかと言ふ。アーガリは平氣で、こんな物は自分が海へ行つて蛸の家（蛸の穴）をあさればいくらでも出て來るといふ。妻は早速アーガリに子供を抱かせて、さうして海へ行つて蛸の家をあさつて、黄金を取つて來なさいと言ふ。聽てアーガリは子供を前抱きに、黄金を肩にうんと負うて歸つて來た。さうして蛸の家をあさればいくらでも出て來るが、持ち切れないので今日は是丈背負つて歸つた。又明日取つて來ようと言ふ。

次の日はアーガリ一人で海へ行つた。さうして蛸の家をあさつて見たがどうしたのか其日は少しも黄金が出なかつた。家へ歸つて妻にその話をすると、それは子供があなたの代りに、黄金の位を嗣いで生れたからであると言つた。

アーガリの夫婦は黄金を澤山集めて、金の柱金の門の立派な家を建てた。さうして妻の兩親を招いで御馳走をしようと、使をやつたが父はアーガリが本當にその樣な長者になつたものと信ぜずそのうちに死んで了つた。アーガリは見舞に行つて、その死體に向つて、孫の行先を見ないで死ぬのは心殘りでせうが、孫はきつと先祖の名を恥しめる事はないでせうと言つた。

（八月二十九日　村山氏）

六四　孝子と火種

母と息子とがあつた。息子が相當な年輩になつたので嫁を貰つたち、母はその時から病氣になつて三年の長患ひをした。息子の夫婦は大變母をいたはつて、原の草のはな〳〵藥の數々を集めて養生をしたが、母の病氣は良くなる見込がなくなつた。いまはの際に母は二人に向つて、「どうか愛する子達、母はいよ〳〵御生へ行くが、最後に親の言ふ事を聞いて與れ、お前達が三年の間煮炊きをして看病してくれた火種は有難かつたが、自分が死んだ後も三年の間はその火種を消さないでくれよ」と言つて身まかつた。

息子夫婦は母の遺言通り火種を大事に取つてゐたが、師走二十九日の大晦日の夕方、野良から歸つて來たらその火種が消えてゐた。夫婦はがつかりして門の方に向つて、「三年の間苦辛して親孝行をした甲斐がなかつた。殘念な事をした」と話し合つてゐると、向ふから七つの提燈をつけた葬式の人々がやつて來た。息子が、「どうかその提燈一つ丈自分に分けてくれませんか」と言ふと、人々は「これは葬式の提燈であるから上げられぬ」と言ふ。「葬式は明日夜の明けると同時に自分達がして上げますから、是非一つ分けて下さい」と言ふと、人々は承知して擔いで來た棺

を軒下に置いて行つて了つた。

翌朝夫婦が葬式を出さうと思つて棺を擔がうとした處が、重くて〳〵動かす事も出來ない。易者の處へ行つたら、「お前達は親の孝行をしたので、天の神樣から位を授けられたのだ」と言ふ。歸つて蓋をあけて見たら、中には寶物が一ぱい入つてゐた。二人はそのお蔭で潤澤な世帶を治めたといふ事である(juntakuna shike usamitamudi)。

（五月二十九日　村山氏）

六五　河童聟入

七十歳位の爺さんがあつて、三人の女の子があつた。或る日爺さんは三十俵田に水の汲上をしながら、獨言(nâchui-banshi)を言うた。吾田に水を入れる人があれば、娘三人のうちの一人を嫁に呉れてやるのだが――と言ふと、其處へガワル(河童)が出て來て、「爺さん〳〵、今何と言つた」といふ。「自分は自分の田に水を入れる人があれば、娘を一人呉れるのだが」と言つた」と言ふと、「さあ自分が只今水を入れるから、お前は俺を騙したら尻を喰ふぞ」と言つて、ガワルは忽ち田に水を汲み入れた。

爺さんは心配して家へ歸つた。さうして一番上の娘に向つて、實は斯々と話をして、お前はガワルの處へ嫁に行つてくれぬかと言ふと、「人間の嫁にならなれようが、水の中のガワルの嫁になれといふのは氣でも狂つたのか」と言ふ。二番目の娘を呼んで話すと、私も姉の言ふ通りだといふ。爺さんはエーと大息して、末の子(chushi)を呼んだ。さうして次第を語つて、ガワルの處へ嫁に行つてくれぬかといふと、「自分は親に產されてゐて、親の言ふ事を聞かずにはゐられませんから行きませう、そのかはりに嫁入道具(yâtachi-dôgu)は揃へて下さい」といふ。「お前の嫁入道具は何々か」といふと、「後先なしの瓢七つ(mishiru nânu hyô nanatsu)買うて持たせて下さい」といふ。爺さんは早速それを買つて來た。すると娘は、「ではその瓢をちやんと網にくるんで下さい」といふ。爺さんは言はれた通りにして、「人間の嫁になるなら從いても行けようが、川の中へは入れないから、お前自分でこれを持つて行つてくれよ」と言つて、それを渡した。

娘は嫁入道具を持つて、川の堤に立つて、「さあ嫁に來たから早く嫁入道具を運んでくれ」と言ふ。ガワルは出て來て網にくるんだ瓢を水の中へ入れようとしたが、入れゝば浮き上り〳〵してどうしても入れる事が出來ない。「お前は人を妻にすると言つて、嫁入道具も屆ける事が出來ないのか、出來ないとならば只ではおかないぞ」と言はれて、又やつてみたがやはり持込む事が出來ず、とう〳〵降參して、「あゝもうどうか此の物を持つて歸つてくれ、自分はとても入れる事

が出來ない」と言ふ。「それなら今後お前は自分達姉妹を嫁にすると言つてはならないよ。」「決してそんな事は言はない、」「それから今一つお前は今後自分達が生きてゐる間、田に水を立てるのだよ。」「必ず水を立てる」と約束までして、娘は無事に家へ歸つた。姉二人は妹に頭を下げた。それからはムカなれば(水が乾けば)いつもガワルが田に水を入れ〳〵したので、皆は幸せに暮して後生へ行つたといふ事である。

(五月二十九日　村山氏)

六六　浦　島　話

人間に命を與れるのも、位を授けるのもニラ(龍宮に相當する海底の淨土)の神樣である。

弟は狩が上手で、兄は漁が上手であつた。弟は狩をすれば獲物を持たるしか持つて歸り、兄は漁をすれば魚を持たるしか持つて歸つた。或る日二人、どうだ道具を取替へて誰が澤山獲物を持つて歸るか賭をしようではないかと相談をした。さうして兄は鐵砲を持つて山へ行き、弟は釣竿を持つて海へ行つた。

兄は山で鐵砲を打つたが、丸は鳥(ト)には當らず、樹に當つた。弟はアカミノツルといふ大きな魚を釣り上げたが、手に取らうとする處で釣針を呑んだまゝ逃げられてしまつた。兄は弟に向つて「自分は鳥を射つ事は出來なかつたが丸は拾つて歸つた。お前は針を切られたからお前の負けだ」と言つて、澤山の金を請求した。弟は兄の求める丈の金がないので、何とでもして釣針を捜して來ようと思つて、夜晝三日の間海を歩き廻つた。處が三日目に白髮の爺さんに逢つた。爺さんが「子供々々、お前は夜晝三日海に來て物を捜してゐるやうだが、何の故だ」と言はれる。弟が事の次第を語つて、どうか助けて下さいと賴むと、「では自分の背中に乘るが良い」と言はれ、弟が老人の背中に乘つたと思つたら、二人はいつの間にかニラの世界に來てゐた。

ニラでは此處もドン〳〵彼處もドン〳〵、遊び(遊宴)の場へばかり案内され、御馳走を受け三日を過ごして了つた。その三日が人界では三百年になつてゐた。弟が鄕里の事を思ひ出して、これかち歸りますからといふと、爺さんは年寄らぬ息を籠めた小さい箱を呉れた。「此の箱は決してあけるなよ、あけると難儀をするから」と言はれ、弟はその箱を貰つて又爺さんに負はれて鄕里へ歸つて來た。

鄕里へ歸つて見ると、以前とはすつかり樣子が變つて、自分の家には知らぬ人ばかり住んで居り、庭の木が大木になつてゐた。村外れの田の草取をしてゐる七十歲餘りの老人に話を聞くと、五代前に海へ行つたまゝ行途知れずになつた話は聞いてゐるが、との事である。どうすることも

出來ないので、弟は煙草を吸ひながら、あけるなと言はれた小箱を煙管の先であけて見た。處が中からシーッと音がして煙が出て、弟はその煙に乘つて天に上つてしまつた。

（五月二十九日　村山氏）

六七　兄弟の仲直り

兄弟仲違ひして、往來を絶つてゐた。兄は勤め人で弟は狩を仕事にしてゐた。或る日弟は山へ猪射ちに行つて、誤つて人間を射つた。弟はしほ〳〵と兄の家へ行つた。兄が、「用があるなら早く話せ、物貰ひの樣に軒下に立つな」と言ふ。弟が實は斯々の次第で、自分は生きて居れないから別れに來ましたと言ふと、兄は眞事その通りかと言つて、妻に强い酒を出させ、弟と二人で飲んで山へ行つて見たら、人間と思つたのは大きな猪であつた。二人は大喜で猪を擔いで歸つて祝をした。それからは兄弟仲良く暮したといふ事である。

（五月二十九日　村山氏）

▽此の話は喜界島昔話にもあつた。昔話の類型に加へらるべきかどうか、兎に角採錄して置く事にする。

六八　片身の皮袋（梗概）

母が殘して死んだ皮の袋を、息子は煙草入にしてそれを持つて毎日働いてゐた。或る日野良で仕事をして一服煙草を吸つてゐると、馬が交つてゐたが、息子が煙草入を締めると離れなくなり、開くと離れるので、これは誠に良い物だと喜んでゐるうちに、或る村の長者の家で嫁取があつた。息子はその家へ忍び込んで新婚者を困らせ、翌日醫者ユタを呼んで大騒ぎしてゐる處へ素知らぬ振りをして行き、面白く掛聲をしながら事件を解決させ、澤山の褒美を貰ひ幸福に暮す事が出來た。處が犬が此の袋を食つて了つて、犬はその罰であの樣に惡い癖があるといふ。

（五月二十九日　村山氏）

六九　山の神と童子　其一

母と幼い息子とがあつた。何の地位もない貧乏な親子で、母が毎日山で薪を取つて、それで暮しを立てゝゐた。やがて子供は十一か二になつて、母に向つて、「母々、これまでは母に難儀をさせましたが、これからは樂をさせませう。私が母の代りに薪を取りますから、今日からはうち

に居て下さい」と言つて、それから毎日山へ行く事になつた。母は喜んでいつも辨當を造つて子供に持たせた。

子供がいつもの樣に山へ行つて、木の枝に辨當を下げて、その木に登つて枯枝を取つてゐると其處へ白髪の爺さんが出て來て、木の上の子供を見上げ〳〵、下げてある辨當を食ひ始めた。子供は枯枝を澤山取つて下りて來て、爺さんに對つて、「爺さん、母の造つた辨當ですが、遠慮なくお上り」と言ふ。爺さんは、「年寄れば饑じいものだ」といふ。子供は薪を負つて歸つて來て、母に山であつた話をした。「さうであつたか、明日は二つ造つて上げるから、一つはお爺さんに上げて一つはお前食ふようにしなさい。」母はさう言つて、翌日は二つの辨當を造つた。子供がそれを持つて山へ行つて、木の上で枯枝を集めてゐると、又爺さんが出て來て、上の子供を見上げながら辨當を食ひ始めた。子供は木を降りて、「爺さん又來られましたか、今日はお母さんが二つ造つてくれましたから、一つ食つて足らなかつたら、もう一つ食つても良い」と言つて、二つ共爺さんに上げて歸つて來た。

三日目は辨當を一つ持つて行つた。母がよそへ行くので早く歸るようにとの事であつた。子供が山へ行つて木に上りかけたら例の爺さんが出て來られて、「一寸待ちなさい、お前に言うて聞かせ度い事がある」と言はれるのである。「實は自分は神樣である。自分の言ふ事を正氣で聞いて、その通りにするのだよ。天竺といふ處に立派なお寺がある。お前は其處へ行つてお詣りをするが良い。行く時誰かゞお前に賴み事をする筈だから、その賴み事も聞くが良い」と言ひ終つたかと思ふと、爺さんは忽ち樫の大木になつてしまはれた。

子供は家へ歸つて、母にその話をした。さうしていよ〳〵天竺といふ處へ行く事になつた。行くにすれば道中の食物がない。それで母と相談して、近所の長者の家へ行つて米味噌を借りることにした。行くと長者が何用だと言ふ。實は斯々と話すと、「さうか、それは丁度良い都合だ。實は自分の娘が三年の間患つて、良くもならず惡くもならずにゐるが、どうか序に娘の爲までトート(祈願)して來て呉れ」と言ふので、子供はオー(はい)と言つて約束して、米と味噌を借りて來た。さうして家を立つて、天竺へ旅立つた。

子供は途中の立派な家に宿を借りた。するとその家の主人が「お前は何處へ行くのだ」と訊く。實は斯々と話すと、「それは幸の人が來てくれた。實は此の家はサンダン花といふ花を造つて、その花を錢金にして暮してゐたが、近頃元木と二番木が枯れて、今では三番木丈しか花が咲かない。どうすれば元木と二番木に花が咲くやうになるか、序に天笠のお寺でトートして來て呉れぬ

か」と言ふのである。息子はこれもオーと約束した。其夜は其家に泊つて、明日は辨當を拵へて貰つて、出かけようとすると宿の主人が、「先へ行くには大きな川を渡らんにはならん」と言ふ。

「さうですか、行つて何とかしてみませう」――。行つたら成程大川がある。「さあ困つた事になつた、どうすれば此の河が渡れるか」と心配してゐると、川の向ふをミンブタ女子（顏の腫れた醜き女）が歩いてゐる。目も鼻も分からぬ醜い女である。「おうい〳〵、此の川はどうすれば渡れるか。」子供が叫ぶと女は瞬き一つする間にスーツと川を渡つて子供の側へ來た。さうして「何處へ行く子供」といふ。實は斯々、といふと、「さういふ事であるか、自分は陸に千年川に千年海に千年生きて來た者で、まこと人間ではない。天に上らうと思つてゐるが上る術を知らず、目腫れ鼻腫れしていつ迄も地上を彷徨つてゐる。どうすれば天へ上れるか、天竺へ行つてトートして來て呉れぬか」といふので、子供がオーと約束すると、「では私の頭に乘りなさい」といふ。乘つたと思つたら、ツーと川を渡つて忽ち向ふ岸に着いた。遙か向ふに立派なお寺が見える。子供は勇んで寺へ行つた。行つたら此間の爺さんがゐられて、さうして言はれる。「お前は幾日で來たか、」「夕べ一晩泊つたばかりです。」「お前は何か途中で頼まれた事はないか、」「頼まれました。」「何を頼まれたか。」「實は……」と、近所の長者の娘の話をすると、「あゝそんな事か、それは其家の雇人や近所の男といふ男を集めて、娘に杯を差さしてみて、受取つた相手の男に家の財産を呉れるといふ事にすれば、娘の病氣は直ぐ直る。その外に何も頼まれなかつたか。」三段花の話をすると「それは昔その家の先祖が、その花の根元に金の壺を埋めて置いたのを、子孫がいつまでも知らずにゐるので、それを掘出させるつもりで花を枯らしたのだ。それを掘出して一つはお前が貰ひ、一つは其家が取るようにすれば、一番木二番木はすぐ生きかへる。もう何も頼まれなかつたか。」子供は又ミンブタ女子の話をした。「さうか、その女に會つたら言うてやれ、お前は慾たれ者が、持つてゐるニンジョの玉一つを人間に呉れさへすればいつでも天に上れるのだと言へ、それ丈か頼まれた事は。」「はいそれ丈です」と言ふと、爺さんは又樫の大木になつて了はれた。子供は道を返して大川の處へ戻つて來た。戻つて來たらミンブタ女子が待つてゐて、「首尾はどうでした」といふ。「先づ川を渡してくれ、それから語らう」――。女は子供を頭に乘せて、ツーと川を一渡りに渡る。そこで子供が、「お前は玉を持つてゐるだらう」と訊くと、「持つてゐる」といふ。「お前は慾たれ者が、その玉一つは自分に呉れなさい、さうすればいつでも天へ上れる」といふと、「上げませう」と言つて、女が子供の手に一つの玉を渡したと思つたら、遠くの方から恐ろしい大きい音が聞えて來て、さうして附近は忽ち霧で被はれて了つた。子供は恐ろしくなつて

ドン〳〵逃げ出した。遠くまで逃げて振返つてみると霧が霽れて水の柱が空高く上つてゐる。女はその水に乘つて空へ上つて了つた。

子供は玉を懐に入れて、だん〳〵歩いて三段花の家へ來た。來たら主人が「首尾は如何でした」と訊く。斯々すれば良いとの事であつたと話すと、主人は早速花の根元を掘つた。果して黄金の壺が出たので、その一つを子供に與へたら、枯れてゐた元木と二番木が直ぐ芽をふき出した。

子供は黄金の壺を貰つて喜んで歸つて來た。今度は隣の長者の家である。行つたら長者が「首尾はどうだつた」といふ。斯々すれば良いとの事でしたと話すと、長者は早速家の雇人構はず近所構はず、男といふ男をすつかり集めて、娘に杯を差させて見た。が娘は誰にも一向杯を差さない。殘つてゐるのは天竺から歸つた前の家の兄一人である。「お前も近所の男である、否と言はずに杯を受けてみてくれ」と言はれ、子供が行つたら娘は直ぐ杯を取つて差出した。が子供は一向それを取らうとしない。長者が、「神様のなされた事だ、取つてくれ」といふので、子供はとう〳〵杯を受けた。すると娘の病氣は直ぐ快くなり、立つて舞を舞つた。

子供は母を連れて長者の聟になり、いつまでも幸せに暮したといふ事である。

（五月三十一日　村山氏）

七〇　山の神と童子（梗概）其二

母と息子と二人暮してゐる。子供が七つになつたので、母がこれから薪を取つて家の助けをするやうにと言ひつける。さうして母は錢を持つて鍛冶屋に行つて小さい鋸を造つて貰ふ。さあこれで薪を切つて來なさい。子供に斧は危いから——と言つて、辨當を持たせて山へやると、子供が仕事をしてゐる間に白髪の爺さんが出て來てその辨當を食べて了ふ。家へ歸つて母にその話をすると、母は翌日は辨當を二つ造つてくれたが、これも爺さんに食はれて了つた。次の日は三つ持つて行つたが三つ共又爺さんに食はれた。子供が何の不服も言はずに歸つて行くのを爺さんは呼止めて、毎日々々辨當を食はれて困つただらう、就ては今日から七日目の日に天竺の國へ來い來る時は決して人に傳言を頼まれてはならぬぞといふ。

子供は母と相談して天竺へ行く事になつて、東の長者の處へ米借りに行つたが、長者の娘が永の患ひで良くもならず惡くもならず困つてゐるので、天竺でそのわけを訊ねて來てくれと頼まれる。斷つたが、そんなら米は借さないと言はれ、傳言を引受ける。そして天竺へ旅立つ。

途中に幅一里長さ千里の川があり、川の傍に目剝婆さんがゐて、自分は天にも上れず地にも棲

めず困つてゐるのだが、天竺で天へ上る方法を聞いて來るなら渡して上げようといふ。子供はそれを斷つて川上へ三日川下へ三日歩いて見たが、とう〳〵渡る處がなく、婆さんの願を聞いて渡して貰ふ。婆さんが手にした眞玉を川の水につけると、上の水は上に止り下の水は下に止つて、河中に道が出來たので、子供は草履を履いて渉る事が出來た。次に九尺角のビードロ張の立派な家があつて、子供が宿を乞ふと、此の家にある三段花の花が親の世までは咲いて今は咲かないのは何の故か聞いて來て呉れと頼まれる。これも一度は斷つたが遂に引受け、翌朝は道を教へられて天竺へ行く。大變立派な家があつて、門を入ると先達てのお爺さんがゐて、良く來たね子供、途中で何か頼まれはしなかつたかといふ。實は斯々といふと、さうか頼まれてはならぬと言つたのはお前の心試しであつたと言つて、お爺さんは一々わけを話してくれた。後は(其一)の話と殆ど同じいので略する。但し目剝婆さんから一つの玉を貰つたら婆さんは忽ち上天して了つたので子供はどうして川を渡つたら良いかと途方に暮れるが、思ひ付いて玉を水につけたら前と同じ樣に渡れたと語られてゐる。

(六月八日　差司氏)

七一　人喰猿

遠方から妻を貰つた男が、夫婦で妻の里へ親ゲンドーに行つた。色々御馳走になつて、夫は用事があるので先に歸つた。處がいくら待つても妻が歸つて來ないので、夫は又妻の里へ行つた。行つたら後片付けもさせずに歸へしたのだがどうした事だらうと言ふ。夫は心配して歸つて來た處が、道の途中で子供が草を刈つてゐるので、「子供々々、美しい姉さんに逢はなかつたかね」と訊くと、「その姉さんは人喰猿に攫はれて、金の鎖で縛られて、木綿を績がされてゐる」と言ふのである。夫は人喰猿の家を搜して行つた。さうして床下へ入つて、妻の坐つてゐる下へ行つて、どうすればお前を助ける事が出來るか」と訊くと、妻は、「鐵砲を持つて犬を連れて來なさい」と言ふ。

人喰猿は天井にゐて、下の話聲を聞いて、「これはたゞ事でない。易者を呼んでわけを聞いて見よう」と言つて、自分の子供を使ひにやつたら、蟹の物識殿がやつて來た。蟹は家へ入ると急に騒ぎ出した。「蟹はダチアカン」——。人喰猿は蟹を庭へ投げ殺した。今度は蛙の物識殿が呼ばれて來た。蛙は家へ入るやいきなりポンガーと言つて逃げ出した。此の時夫は犬を家の中へ入れ

た。小猿は長持の中に匿れたが直ぐ犬に喰ひ殺された。妻が夫に、「高倉の入口で鐵砲を構へてゐなさい」と言ふ。夫が高倉で待つてゐると、人喰猿は其處へ遁げ込んで來たが、鐵砲で射られて了つた。

妻の外に大勢の女が攫はれて來てゐた。夫は皆を助け出して、「食ひ度い物を食ひ、持ち度い物を持つて、うちへ歸りなさい」と言ふ。皆が、「いや〳〵あなたが先づ一番好きな物を取つて下さい」といふので、夫婦は好きな寶物を持つて歸り、一生安樂に暮したといふ。

（五月三十一日　村山氏）

七二　夜烏と黑烏

飛烏の頭は鵬の烏である。その鵬の烏が人間の仕掛けた彈きヤマ（罠）に足指を挾まれた。大勢の烏共が集つて、何とかして助けようと三日の間會議をした。處が夜烏が、挾まれた足指を喰ひ切つて了へば雜作はないではないかと言ふ。すると黑烏が、喰ひ切るなら罠の繩を喰ひ切つてはどうだ。三日もかゝれば切れるだらうと言ふ。一同その通りして鵬の烏を助けた。

鵬の烏は後で夜烏を怒つて、お前の樣な奴は夜出て晝は出るなと言つた。さうして黑烏には、お前は人間の食べる穀物の初穗を取つて食べるやうにせよと言つた。だから夜烏は夜に飛び廻り黑烏は穀物の初穗を食ふやうになつたといふ。

（五月三十一日　村山氏）

七三　迫田卯平話

1　裸體で詫びる

卯平が殿樣の側にゐる間は、科人を出さなかつたと言ふ。

或る日殿樣の大事な烏に餌を與れた家來が、籠の蓋をしめ忘れて烏を逃がした。心配して卯平に相談すると、「よし自分が良い樣にしてやる」と言つて、卯平は翌朝、殿樣の手水を使はれる處へ行つて、雪の降る中に眞裸體で手を擴げていつまでも立つてゐた。殿樣が驚いて、「何事だ卯平、雪の中に裸體で立つて」と言はれるので、「實は殿樣の大事な烏を逃がしましたので、今に烏が來て止るかと思つて待つてゐる處です」と言ふと、「馬鹿な事をするな、烏は百ゐてもお前の命には變へられぬ」と言はれたので事無きを得たといふ。

2　大雨に逢つた話

或る日卯平は殿樣のお伴をしてニレー（狙ひ卽ち鳥射ち）に行つた。處が途中で大雨が降つて、

皆ずぶ濡れになつた。お伴の者は雨具を持つて行かなかつたので大變な心配である。すると卯平は手で顏の水を拭きながら盛んに、「プツプツ、有難うございます〳〵」と言ふ。殿樣がそれを見て、「雨に濡れて皆が困つてゐるのに、何が有難いのだ」と言はれると、「若し鼻の穴が上に向いてゐたら、雨が入つて大變でせうが、幸ひ下に向いてゐますので、それで有難うございますと言つてゐるのです」と言ふ。殿樣は又感心して、雨具を忘れた事を咎められなかつた。

3　鷹の御馳走

或る日殿樣が卯平に、「今夜鷹の御馳走をするから來い」と言はれた。行つて見ると、鷹ではなく高菜であつた。卯平は知らぬ振をしてそれを頂いて歸つた。

それから幾日かの後、卯平が今度は殿樣に、殿樣々々、何々の原に鷹が四五日前から下りてゐますが、射つて來ませう」と言ふと、殿樣は大喜びで鐵砲を持つて出かけられた。原へ行つて、「鷹は何處だ〳〵」と言はれるので、卯平は、「それ〳〵其處に澤山あります」と言ふ。「それは高菜ではないか。」「はい先達て御馳走になりました鷹で、肥しを澤山入れて置きました。」

（以上三話、五月三十一日　村山氏）

七四　桃太郎

母が川で洗濯をしてゐると、大きな桃が流れて來たので拾つて歸つて父と二人で割つたら、中から子供が生れた。二人はその子に桃太郎と名をつけ、可愛がつて育てたら忽ち大きくなつた。

桃太郎は或る日ニラの島（龍宮に相當する）へ行つた。行つたら或る家に一人の爺さんが泣いてゐて、島の人は皆鬼に喰はれて自分一人殘つたといふ。爺さんの側に一つの羽釜があつて、その蓋の裏に鬼の島へ行く道筋が書いてある。桃太郎はそれを見て、鬼の島へ行く事になつた。

遠い〳〵或る野原の眞中に眞石があり、その石を取退けると下に通ずる穴があつて、一本の太繩がぶら下つてゐる。その繩に摑まつて下りると鬼の島である。桃太郎は鬼の島へ下りて、鬼を皆殺しにした。たゞ一人の老人鬼丈命を助け、その代り鬼の寶物をすつかり出させ、それを持歸つて二親に孝行をしたといふ

（五月二十八日　宗ツル女）

七五、繼子の出世

繼母が或る日シュンと言ふ繼息子に、今日はチンチョー(井戸)淡へをするから、井戸へ降りよと言ふ。シュンは降りて井戸底の砂を籠に盛つてはその上に錢を載せて、母に引上げさせる。母はシュンを井戸に埋め殺す計畫であつたが、井戸から錢が出て來るので喜んでゐる。シュンはその間に横穴を掘つて、その中に隱れる。

シュンは危い命を助かつて、沖永良部島にすれば大山の樣な處を開墾して田を造つたら、鳥が飛んで來て田の草を取つたりして、米が澤山取れる樣になり、後には偉い人になつた。

(五月二十八日　宗ツル女)

七六　繼子の椎拾ひ

繼母があつた。或る日繼娘(姉)と自分の娘(妹)を、山へ椎拾ひにやつた。姉娘には尻の破れた籠を持たせ、妹娘には尻の破れてゐない籠を持たせた。山へ行つて姉娘はいくら椎を拾つても籠に充たず、妹のは直ぐ一ぱいになつた。さうして妹はさア歸らうと言つたが、姉は自分は籠が一ぱいになるまでは歸らないと言つて、だん〳〵山奥の方へ入つて行つた。

山奥へ行つたら大きな木があつて、その上で鼠が大勢、色々の寶物を置き並べて遊んでゐる。姉娘がニヤーオーと言ふと、鼠共はびつくりして皆逃出す。姉はその寶物を持つて家へ歸つた。繼母はそれを見て大變喜んで、今度は自分の娘に寶物を拾はせようと思つて、次の日は姉には尻の破れてゐない籠を、自分の娘には尻の破れた籠を持たせて山へやつた。妹は姉のやつた通り鼠の處へ行つたが、ニヤーオーと言うた時鼠の逃げ騷ぐ有樣が可笑しかつたので、大聲で笑つたら鼠共は氣がついて、昨日もお前だつたかと言つて、娘をさん〳〵引搔いた。妹娘は鼠に引かゝれた上、何も得ずに歸つた。

(五月二十八日　宗ツル女)

七七　次男の孝行

齡な爺さんが二人の息子夫婦の心を試さうと思つて、先づ兄の夫婦を呼んで、「自分は齒が抜けて物が食はれなくなつたから、お前達の子供を山に埋めて、乳を自分に飲ませてくれ」と言ふと、兄の夫婦は、「親は年寄れば齒の抜けるのは當り前である。あたら子供を捨てる事は出來ない」と言ふ。今度は弟の夫婦を呼んで話したら、「子供は又產む事も出來ますが、親は二度と求めら

れぬ。親の言ふ通りしませう」と言ふので、親は、「では何處々々の山の東の方の一本松の根元に穴を掘つて子供を埋めよ」と言ふ。泣々弟夫婦が山へ行つて、その松の根元を掘つたら、其處から澤山の金が出た。二人は喜んでそれを持ち歸り、その金で親を大事に養うた。

（五月二十八日　宗ツル女）

▽平氏の話も大體同じい。その話では老人の名はチョンヂョウフシニーとなつてゐた。尙此の話は喜界島にもあつた。

七八　天人女房

ミカルといふ人が野原からの歸りに、アモリ（天降り卽ち天人）が川の中で、珠の柄杓で水を浚んで水浴びをしてゐるのを見つけた。側の松の木に飛び衣裳が掛けてあるので、ミカルはそれを奪ひ取つてアモリを自分の妻にした。

やがて二人の間に二人の子供が出來た。或日五つになる子が三つになる子を負ぶつて、子守歌を歌ふ。

泣くなくな童（ワラビ）よ〳〵

汝母（ウラアヤ）が飛衣裳
汝母が飛笠
六股の倉によ
粟束の下によ
泣かねばどよ童
其（ウリ）呉りゆんどうや

天人の母はそれを聞いて、高倉の粟束の下から飛衣裳を取り出し、身につけて天へ飛上つた。天人は八人兄弟の末の一人娘であつた。兄達に自分は地上に五つなる子と三つなる子を置いて來たと語ると、その子を連れて來いと言ふので、再び地上へ降りて、二人の子を左右の腕に抱いて飛ばうとしたが、飛ぶ事が出來ず、泣々一人で又天へ還つたといふ事である。

（五月二十八日　宗ツル女）

七九　難　題　聟

1　世界の三堅め

或る長者に一人娘があつた。或る時長者は、世界の三堅めの話の出來る男に、娘を嫁にくれようと布令を出した。此處に三人の兄弟があつて、先づ兄が長者の家へ行つて、私が世界の三堅めの話をしませうと言つて、夜晝七日話を續けたが、その話は一堅めにも半堅めにもならず、次に二番目が出かけたが、これも七日話し續けて一堅めにも半堅めにもならなかつた。そこで三番目の弟が、「自分ならその樣な話は一時間もかゝらぬ」と言つて出かけて行つた。長者の前へ行つて「私が世界の三堅めの話をします」と言ふと、「話してみよ」と言ふので

天と地は雨で一堅め
海と山は川で一堅め
娘と私は子供で一堅め

と言つたら、長者は娘に立派な嫁入仕度をさせて、さあ娘を連れて行つてくれと言つた。三番目は首尾良く、美しい娘を嫁に貰つて家に歸つた。

（五月二十八日　宗ッル女）

類話一　前半は同樣。三男と長者の問答、長者「三堅めの一つは何だ」、三男「天と地」、「その鍵は」、「雨」。「三堅めの二つは何だ」、「山と海」、「その鍵は」、「川」。「三堅めの三つは何だ」、「娘と自分」、長者は今度はその鍵を訊ねなかつたといふ。（六月十二日　平氏）

類話二　村山次郎氏の話では、世界の三堅めは、雨と水、天と海、山と地。（五月二十九日）

2　繩　綯　ひ

聟取の女の子一人持つてゐる長者があつて、一時間のうちに繩を坐つてゐる丈の高さ綯へる者を娘の聟に貰ふと布令た。大勢の男が出かけて行つて一生懸命に綯つたが、誰も綯へる者がなかつた。處が一人の男が自分は一向綯つてみようとせず、立つて皆を見物してゐるので、長者がお前はどうして默つて見てゐるかと訊くと、自分は其位の繩は急がずゆつくり綯ふ事が出來ると言ふ。では綯つてごらんと言ふので、男は藁を取つて一尋の半分位綯つてそれを立てゝ見せた。長者は感心して、その男を娘の聟に貰つた。

（六月十二日：平氏）

3　長　い　話

物語り好きな爺さんがあつて、美しい娘を持つてゐて、自分が閉口するまで長い物語りを語る者があつたら娘をくれると布令を出した。大勢の者が我も〳〵と物語りを語つたが、爺さんは一向閉口しなかつた。處が一人の少年があつて、自分が爺さんを閉口させるから娘は本當に呉れる

ねと言ふ。呉れると言ふので少年は

一つ取つて蛙 tiichi tuti gaku

二つ取つて蛙 tachi tuti gaku

といつまでも同じ事を言ひ續けた。爺さんは忽ち閉口して、あゝ八釜しい止めてくれと言つたので、少年は約束通り娘を貰つた。

（六月十二日　平氏）

八〇　玉のマグシル

アガレヒラシマの玉のマグシルと言ふ非常に美しい女があつた。カジマルのカジンと言ふこれも非常に立派な男が、玉のマグシルを忍んで見ようとして、三十の馬から二十の馬を選び、二十の馬から十選び、十の馬から五つ選び、五つの馬から一つの馬を選び出し、三十の鞍から二十の鞍を選び、二十の鞍から十選び、十の鞍から五つ選び、五つの鞍から一つの鞍を選び出した。その鞍は前鞍は月の型、後鞍は太陽の型、右のオーエ（敷皮）はハビル（蝶）型、左のオーエはイキダ型。カジンは馬に乘つて金鞭かけて、アガレヒラシマへ出かけて行つた。途中で子供に行逢つたので、「マグシルの家は何處だ」と訊くと、子供は男の立派な姿に愕いて遁げようとする。カジンはそれをなだめて、チョージ（香ひ袋）を與へて、「マグシルの家は何處だ」と訊く。「北の谷（ヲタ）を北の頂（ヲチ）上つて、又北の谷下りて北の頂上れば行かれる」――。行くかい行き居つたら途中で五人の男に行逢つた。男達が言ふ、「自分達はマグシルを忍んで行つたが駄目だつた。お前も戻るが良からう」。然しカジンはどん〳〵馬を走らせて、玉のマグシルの家の門へ行つた。女は丁度庭へ下りて花見をしてゐた。カジンは女を見て、成程美しい女だと思ふ。女もカジンを見て、立派な男だと思ふ。玉のマグシルがいつまでも庭に立つてゐるので、家人は、「太陽の光りも拜んだ事のない女が、どうしていつ迄も庭に立つてゐるのだらう」と言つて出て見たら、立派な殿ちよがゐるので、殿ちよを家へ招じ入れた。マグシルとカジンは話が合つて、夫婦になつた。さうして牛を殺して七日七夜の大祝ひをした。

七日目にカジンは、「自分はこれから親見舞ひに行つて來る」と言つた。七日はいけないから八日目に行きなさいと言ふのも聞かず、馬に乘つて出かけて行つた。處が途中に待ち受けてゐた五人の男が穽を掘つてあつて、カジンは馬諸共その穴に落ちて了つた。男達はカジンと馬を燒いて灰にして了つた。待つても〳〵カジンが戻つて來ないので、マグシルは下男下女を連れて駕籠に乘つて夫を捜した。山の中を方々捜したが見當らないので、召使達はマグシルを駕籠に入れたま

ま山の中に置きざりにして逃げて了つた。雨が降つたので女は岩陰に隠れた。そこへ唐鳩（山鳩）が二羽飛んで來た。唐鳩さへも夫婦仲良く遊んでゐる、自分も夫を捜し出さねばならん。――マグシルは又山の中を跛足で捜し歩いた。夜の暮方山を出て、北の方を向いて行くかい行つたら、小さい明りが見えた。近づいて見ると障子を立廻した立派な家で、障子の間から中を窺いて見ると、捜してゐる夫が机に向つて書き物をしてゐる。夫はマグシルを見附けて、「此處はお前の來る處でない。早く歸へれ」と言ふ。がマグシルは何と言はれても歸らない。仕方がないので、カジンは臺所の土間の隅に穴を掘つてその中にマグシルを匿し、上に鍋蓋を被せた。其處へ御生の役々が五人やつて來て、人間の臭ひがするといふ。カジンが、「私が生殺しにされた爲でせう」と言ふと、さうかと言ふ。翌日は三人の役々がやつて來た。さうして又人間の臭ひがするといふ。カジンが辯解すると、役々はさうかと言ふ。次の日は白髪のバラ〳〵生えた爺さんがやつて來た。爺さんは二人に事情を聞いて、「それでは元の人間にしてやるから、二人共東の縁側に立て」と言つて、生きる水（ヒ）冷ぐる水を二人にかけた。と同時にその家は玉のマグシルの家に變つて、カジンは妻の家の表座敷の机の前に坐つてゐた。それからカジンは親達を呼んで、皆幸せに暮したといふ。

（五月二十二日　森山氏）

八一　手なし娘

昔アオナの國アオナの殿様に一人息子があり、母は繼母で女の連れ子があつた。息子は相當な齢になつて遠方の殿様の娘を嫁に貰つたが、その嫁も繼母に育てられた者だつた。

嫁は身重になつた。丁度其時夫は江戸へ三年の勤めに行く事になり、出かける時妻に、子供が出來たら近所の者を頼んで手紙で知らせよといふ。

或る日繼母（夫の繼母）は自分の娘に、うちの嫁は惡い嫁であるから今日は汐汲みにやつて、後から尾いて行つて海へ突落してやると語る。嫁はそれを聞いて自分の村へ遁げ歸り、叔父に話した。すると繼母は追かけて來て、何も心配する事はない汐汲みになどやらないとて連れ歸り、嫁を庭に立ててその片腕を切つた。舅がその事を江戸の息子に知らせたら、手のない嫁でも大事にして、父は嫁と一緒に別居してゐて下さいといふ返事が來た。

やがて嫁は男の子を產んだ。――以下手紙の往復の條、嫁の手が元の様になる條は、昔話採集手帖二十五番に同じい。

手が元の様になつた嫁は、或るお寺に泊めてもらう事になつた。其處へ夫と里方の叔父が尋ね

て來て、後は皆幸せになつた。

▽森山老の話でも夫の母が繼母となつてゐた。此の話では嫁の叔父はあらはれない。他は大體に同じい。話し方は孰れも簡單であつた。

（六月九日　差司氏）

八二　虱たれ童子

昔沖繩の大主加那志（王様）に一人娘があつた。沖繩一番の美しい女であつたが似合ひの夫がないので、町のアデ道（交叉路）に家を造つて娘をその中に入れて、かうして置けば良い相手が出來るだらうと思つてゐるうちに、鬼が來てその娘を攫つて行つた。王様の一人の娘が見えなくなつたといふので、沖繩中の人が集つて、娘さんを捜す相談をしたが、誰も助けに行くと言ひ出す者がない。

そこへ一人の貧乏な、虱たれ童子（shiranitari warabi）があらはれて、自分が捜して來ると言ひ出した。皆は嘲つて相手にもしない。中には唾をかける者もある。しかし子供は、屹度自分が捜して見せると言ひ張るので、それ程に言ふなら行つて見るが良いといふ事になつて、皆で虱を取つて綺麗にして出立させた。（以下子供が鬼と遭遇する條は脱落してゐる）子供は隱し持つた

疊針を鬼に差した。針には長い絲がつけてある。子供はその絲の後を辿つて、北の原の眞中にある鬼の穴へ降りた。王様の娘は鬼に毎日御馳走を食はされてゐた。肥るのを待つて、鬼は娘を喰ふ算段である。子供が行くと、娘は子供に桶を被せて匿まつた。やがて鬼が歸つたので、娘は鬼に強い燒酎を飲ませ、醉ひつぶれたのを見て、子供と二人で鬼を蒲團蒸しにして殺した。

二人は鬼の島を出て歸つて來た。歸りながら娘が言ふ。自分の父の王様がお前に何か欲しい物はないかと訊ねたら、床の前の泉德利が欲しいと言ひなさいよ——と。娘が無事に歸つたので、王様は大祝をした。さうして命の恩人である子供に、欲しい物があつたら何でも與へるから言うて見よと言はれるので、泉德利が欲しいと言ふと、王様はそれを呉れられた。此德利は欲しいと思ふ物は何でも出る不思議な德利で、子供はそのお影で一生樂に暮す事が出來たといふ事である。

（五月二十二日　森山氏）

八三　島建國建

島コーダ國コーダが島を建設して、

Shimakóda-kunikóda ga shima funudi,

島は建設したが島が地搖れし、土がぐらついて、

shima wa funudashiga shima nu jiiyutamichi shi, micha nu yugumichi,

此處踏めば彼處上り、彼處踏めば此處上り、

fuma kumiba ama agari, ama kumiba fuma agari,

仕方がないので神に相じた(相談した)。

相じた處が神樣が言はれる。

汝程の島コーダ國コーダ、その位の事が分らなかつたのか、

Ura fudu nu Shimakôda-kunikôda, unugure nu kutu wakara-dana atina,

東の岸には黑石置け、西の岸には白石置け。

agari nu kishi niwa kuruishi uki, iri nu kishi niwa shiruishi uki.

國は建設したが、人間造る事が出來ない。

Kuni wa funudashiga ningin tsukuyunu kutu ga dikiramu.

又神に相じた。神樣は、土で佛樣のこと造つて、息を籠めれば人間が出來る、と言はれる。

人間は造つたが、子の出來る方法は如何であらうか。又神樣に相じた。神樣が言はれる。

えけが(男)の家は風上に造れ、女子の家は風下に造れ。

Yikiga nu yâ wa uwara ni tsukuri, unagu nu yâ wa shâra ni tsukuri.

造つた處が、風上の男の息が、風下の女の息にかゝつて、子が出來るようになつた。

子は出來るようになつたが、食べるものは如何。又神樣に相じた。神樣は言はれる。

ニラが島(龍宮)で、物種を貰つて來て、作らするごとせよ。

Niragashima iji, munudani murati kichi, chikurasunu kutu shiri.

島コーダ國コーダは神樣の敎へに從ひニラが島へ行つた。さうしてニラの大主(ウフヌシ)にお願ひしたら、

初穗祭をしてない故、物種は出されぬ、新祭(アラマツ)した上で上げよう。

Ufatsu matsuti nantuni, munudani wa ijasaramu……

と言はれる。そこで島コーダ國コーダ、

これ程の島コーダ國コーダが來たる上、たゝ戻る事はならじ、

kannu Shimakôda-kunikôda ga kicharu ui tada mudunu kutu wa naraji.

と言つて、田圃の稻の穗を摘み切つて袂に隱し、ニラが島から遁げ歸つた。さうしてニシントーベルアメノカタバルと言ふ處まで來たら、ニラの神樣に追ひつかれ、打倒されて氣が遠くなつ

て死んだ。

日しても二日經つても、島コーダ國コーダが戻つて來ない。天の神樣が心配されて、使ひを遣つて尋ねさせた處が、ニシントー原アメノカタ原に、

目こぼれ鼻こぼれして死んでゐた。

mii kubu.i fana kuburi shi môi shi utamu.

天の使ひが藥を飲ませると、島コーダ國コーダは生返つた。神樣は事情を聞かれ、その穗は元に返して、あらためて貰ひ受けて來るようにと言はれた。島コーダ國コーダは再びニラが島へ行つて、盗つて來た穗を元の稻に接いで、新祭を濟ませて後改めて稻種を貰つて來た。その稻が此の島に古くからある、アサナツヌヨネゴンダネ（asanatsu-nu-yunigundani）である。

（五月十九日　出花池榮老）

▽此の話は話者が幼少の頃、さる老翁のユタ（祈禱占ひ等をする者、女が多い）が唱えてゐたものを、いつとなく覺えたものといふ。そのユタはお竈願ひといふ儀にこれを唱したといふ。沖永良部島は、東海岸の石は黑く西海岸の石は白いといふ。あらまつは舊曆九月十五日に行はれる初穗祭。此の祭が終るまでは、新藁で拵へた海沓を穿く事はならぬと言はれる。

鼠の話島　コーダ島テーシが永良部の國を建てた。建てる時ニラの大主が東の大潮西の大潮を干かせた。最初島は船の浮くごと、彼處踏めばダブ〳〵此處踏めばダブ〳〵とぐらついてゐた。それで島コーダ島テーシが、西の崎に白石東の崎に黑石を置いて、島を安定せしめた。國は建てたが人の種がない。太陽の神（Tidakumu-ganashi）にお願ひしたら、子の星と午の星を降して下された。子の星はエケリ（姉妹に對する兄弟）、午の星はウナリ（兄弟に對する姉妹）である。その二人の息で子供が出來た。

右の二話は昔話の類型には入らないかも知れないが、話法に特徴があるので採錄した。

八四　運定め話

東長者が或る夜イザイ（夜漁）に行つて潮が合はないので、此の位の寄木を枕にして寢て居つた處が、磯の神樣（漁の神樣）島の神樣などが澤山集つて、寄木の神〳〵、今夜村に子供が生まれるから、位をつけて來ようと言ふ。寄木が答へて、私は人間に枕しられて身體が自由にならん、お前さん方行つて來て、私に語つて下さいと言ふ。暫くしたら、先刻の神樣達が歸つて來られて、寄木の神〳〵今夜は二處にお產がありました、西長者の子は女で鹽一升、東長者の子は男で竹一本の位をつけて來ましたと語られる。

生れた子供が大きくなつたので、其二人結婚させた。後になつて男は、妻を追ひ出した。女は直ぐ又金持の家の嫁になつた。先の夫は貧乏して、竹一本でハラ（穀物を入れる大なる竹器）ユイ

(篩)などを造つて、擔つて賣つて歩いた。さうして女の家へもやつて來た。女は直ぐそれと見知つたが、男は少しも見知らなかつた。女は家人が與へた金に更に澤山の金を足して男に與へた。それで男は不思議だと思つて女を良く見たら、自分の元の妻だつたので、恥ぢて舌を嚙んで死んだので其うちで葬式してやつた。送る時女は自分の元の夫だもんだから、人に知れらん樣に涙を落した。其落てたる涙で、送つて行く時には生えてゐなかつたが、歸りには道端に菜が生えて花が咲いてゐた。

道傍に生えた菜は取つて食べぬものだ。其女の涙で生えたものであるから。

(五月十九日　出花老)

八五　鬼と菖蒲

スキと言ふ男が、鹽俵を買うて馬に積んで歸つて來居つた處が、途中で口の八寸裂けてゐる鬼が出て來て、スキースキと呼んで、お前の馬の片足と俵一俵食はせろといふ。スキは怖いので、言はれた通り喰はせた。鬼はそれをたゞ今喰つて、又スキースキと叫んで追つて來た。馬は三つ足になつたので歩くのが遲くなつて、直ぐ鬼に追ひつかれた。さうして又片足と鹽俵一俵喰はれた。二本足になつて馬は益々歩くのが遲くなり、とう〳〵三つ目の脛まで喰はれて了つた。馬は一本足になつてもう一歩も歩く事が出來ない。スキは自分まで喰はれては大變だと思つて、菖蒲グムイ(菖蒲池)に遁げ込んだ。後から鬼も追ひかけて來たが、菖蒲の香ひが高いので、ショウブクシャ〳〵(菖蒲臭い〳〵)と言つて歸つて了つた。其日が丁度五月五日であつた。其日軒に菖蒲を差すのは、其シツキ(謂れ)である。

▽此の話の斷片は土持某女に依つても語られた。

(五月十九日　出家老)

八六　夕鳥の孝行

雨の降る前に鳴く夕鳥は、あれは元は人間であつた。親不孝者で、親が水を汲んで來うと言へば汐を汲んで行き、汐を汲んで來うと言へば水を汲んで行き、薪を取つて來うと言へば藷を掘つて行くといふ工合に親の反對の事ばかりしてゐた。親は死ぬ時、自分の死體はマタ(谷)に埋めてくれと遺言すれば、反對に高いチヂ(山の頂)に埋めて呉れるだらうと思つて、死體をマタに埋める樣に遺言をした。處が息子は此の時始めて正氣になつて、今度こそは親の吩咐け通りにしようとて、親をマタに葬つた。マタは雨が降る度に水が通るので、息子は親の骨が流れはせぬかと心

配して、それで雨の降る前に鳴くのだといふ。

（五月十九日　出花老）

八七　蛸と蝦の丈競べ

蝦が蛸に（或は蛸が蝦に）お前達の仲間の一番大きなものと、自分達の仲間の一番大きなものと丈競べをさせてみようではないかと言ふ。丈競べの約束が出來て、先づ蝦が尻足を伸ばしひげを伸ばしたら、海の鷗が朝から晩迄一日かゝつて漸く尻足の先からひげの先まで飛んだ。蛸も負けないつもりで皆に身體を引張らせたら身體が幾つにも裂けた。さうして今の様な形になつた。それを伸ばして鷗に飛ばせて見たが、畫までもかゝらなかつた。蛸は丈競べに負けた。

（五月十七日　玉江先生）

八八　爺と唐鳩

爺さんと婆さんが粟の草取をしてゐたら、唐鳩が來て粟を食べた。此の鳥は作物の邪魔をする鳥である。爺さんはヘラを投げて唐鳩を殺した。さうして婆さんに、これを持つて歸つてお汁を拵へて置きなさいと言つた。

婆さんはお汁を拵へたが、餘り美味しいので肉は皆んな食べて、爺さんには骨ばかり殘して置いた。爺さんは歸つて來てそれを食べて、婆さんにお前は不人情だと言つた。

（五月十七日　玉江先生）

類話一　冒頭は同じ。婆さんはお汁を皆食べて、鍋の中に糞と小便をし込んで爺さんに食はせた。爺さんは怒つて火吹竹で婆さんを叩いた。さうしたら婆さんは蛙になつて、ヒーラルラールフチチヤンチヤと言つて堅穴の中に入つた。（五月二十八日　宗ツル女）

類話二　これも冒頭は同じ。婆さんが床の鼠を煮て爺さんに食はせたら、爺さんは怒つてこんな物が食へるかと言つて婆さんの顔にかけたら、婆さんは目はげ婆さんになつた。（六月十日　差司氏）

八九　鳥とこかる

クッカル（こかる）といふ鳥は元は黑い着物、鳥は赤い立派な着物を着てゐた。或る日二人ユゼ（力競べ）をした。クッカルは非常に元氣な鳥で、鳥を打負かした。その時鳥はクッカルに着物を取替へられた。だから鳥は今の様に黑い着物を着てをり、クッカルは赤い美しい着物を着てゐるのだといふ。

（五月十九日　玉江先生）

九〇　豚と蝸牛の駈競べ

豚と蝸牛が駈競べをした。合圖と共に走り出すや、蝸牛は豚の尻尾にすがり着いて、豚が約束の場所まで行つて、蝸牛はまだかと後を振返つた時その尻尾から下りて、俺は先刻から此處に待つてゐると言ひ、競走に勝つた事になる。

（五月二十三日　知名校某先生）

九一　雀と川蟬

親が死ぬといふ時、ユムドゥイ（雀）は親の目を落さないうちに會へるやうにと身仕度もしないで急いで行つた。タナガクレバト（川蟬）は身仕度をして行つた爲に、親の死目に合はなかつた。親は遺言をした。川蟬は親不孝者だから日々儲け喰らひをせよ、雀は親孝行だから米を食ふ位につけ――と言つたので、その通になつた。

雀の首に白い型の付いてゐるのは、其時手拭を首に卷いてゐたからである。川蟬が美しいのは其時綺麗に身仕度をして行つたからである。何れも元は人間であつた。

（五月十九日　山本ナツ女）

題話　此の話では女の子三人あり、母が死ぬるといふ時一番の姉は藍を染めて居り、二番目は美しい着物を縫つて居り、いづれも仕事を終つてから見舞に行くが、末娘はウジョー（仕事着）を着たまゝ出かける。母の遺言に依り、大姉は鳥になつて盗み食ひをし、二番目は川蟬になつて虫けらを喰ひ、末娘は雀になつて高倉で米を食ふ樣になつた。（六月十日　差司氏）

村山次郎氏の話は標題の話と殆ど同樣であつた。

九二　馬の卵

貧乏な爺さんと婆さんの二人暮しがあつた。毎日爺さんは山で木を伐り、婆さんは家で機を織つてゐた。或る日婆さんが機を織つてゐると、外を馬の卵賣らう〳〵と言つて歩く者がある。婆さんはかね〳〵機を織つて金を溜めて、その金で馬を買つて爺さんに曳かせて上げ度いと思つてゐたので、これは幸の人が來たと思つて呼び止めて見ると、馬の卵といふのは西瓜であつた。然し正直な婆さんはその西瓜を本當に馬の卵と思ひ込んで、それを買つて蒲團の中に大事に入れて置いた。其處へ爺さんが歸つて來た。爺さん〳〵、今日は馬の卵を買ひました――と言ふと、爺さんは、どれ見せて御覽と言ふ。見せると西瓜なので爺さんは怒つて、これは西瓜ではないかと言つていきなりそれを庭へ投げつけたら、西瓜が割れて、その中からぽつとばかり馬の子が飛び

出した。さうして馬の子は北の方へどん〳〵走り出した。馬の子を逃がしては大變だと言つて、婆さんが後から追かけて行くと、丁度北の家(北隣の家)でも馬が子を産んであつて、今逃げて行つた仔馬がその馬の處で遊んでゐる。此の仔馬は私の馬だから返してくれと言ふと、北の家ではいや〳〵自分の處の馬が子を二疋産んだと言ふ。婆さんは馬の毛色を覺えてゐたので、事情を話して、さうして仔馬を連れて歸つた。

爺さんも大變喜んで、二人で大事に育てたら馬はチーチ(どん〳〵)大きくなつて、やがて薪を二まるきも負ふやうになつた。爺さんは毎日その馬に薪を負はせて歸つて、さうしてだん〳〵金持になつて、二人は良い暮しをする事が出來た。

(五月二十四日　土持某女)

採集日誌

昭和十一年五月十四日。郷里喜界島發、夕方奄美大島名瀬着。憲兵分駐所を訪ひ、沖永良部島採訪旅行の諒解を求む。

十五日。大島支廳を訪ひ、支廳長並に藤村社會主事より和泊、知名兩校長先生への紹介狀を頂く。夕方名瀬港發。

十六日。午後四時沖永良部島和泊着、上陸直ちに和泊校長玉江末駒先生をお訪ねし、源旅館に投宿。

十七日。時々雨降る。玉江先生御來訪、明日出花部落の出花池榮老(八十歳)を引合はせて下さる由。尙先生より島の諸般の事情を承はり、且つ昔話の丁式採集十餘話をなす。

——最初は出來る丈多くの人々に丁式採集を試みた。これは單に話種の存在を知るのみであつたが、さし當り此の島に於ける話の分布狀態を知る上に、又後々の採集に大いに便益した。

夜は青年學校の先生方に就き、方言調査を行ふ。

——喜界島語と沖永良部島語は非常に近似してゐると言はれるが、音韻には相當の隔りがあり

最初は隨分惱まされた。

十八日。午前中大雨。夕方玉江先生見えられ、出花老は近頃歩行が困難故、明日その部落へ案内しようと言はれる。誠に辱けない。

十九日。學校より使ひあり、急ぎ行くと出花老は半里の道を半日かゝつてやつて來られたとて汗を入れてゐられる處であつた。

家事教室で玉江先生の誘導で、「島建國建」「大歳の客」等の話を承はる。

夕方より更に宿屋に玉江先生、出花老、山本ナツ女を招いて、「運定め」「金の茄子（類話）」「雀と川蟬」等の通り話十餘話を伺ふ事が出來た。本格說話のあらはれないのは、傳承者の傳承型の然らしむるものであらう。

二十日。雨頻り。知名村竿津部落に舊友東忠一氏（醫師）を訪ひ、採集計劃の相談などなす。此邊水田多く、苗が伸びて田の草取が始つてゐる。

東瑞の紹介にて下平川校長田中先生にお目にかゝり、乘合自動車にて小米に至り、谷口旅館に投宿する。

二十一日。知名校に橋口校長先生をお訪ねし、古老紹介方に就き種々御便宜を與へられる。

二十二日。小雨。知名校の弓創、大平兩先生が、森山本東老（八十二歳）及び神川盛利氏をお伴して宿へ來られる。森山老のお話で初めて「玉のマグシル」「手なし娘」等の本格的說話を聞く事が出來たが、話は相當の破損が見られた。

二十三日。宿の主谷口氏の御案内にて德時部落採訪。

二十四日。田中先生との約あり、乘合自動車故障の爲和泊まで三里を歩く。

午後出花老が大きな杖を引づつて、宿へ訪ねて來られた。田中先生のお世話で土持某女にも來て頂く。西鄕南州翁在島當時の友人土持政照氏の女であるが、父より昔話を聞いた事はないといはれ、「馬の卵」其他を語られる。

二十五日。中學時代の先輩龍爲隆氏の御案内にて、手々知名部落見學。

二十六日。伊延部落採訪。

二十七日。海軍記念日。和泊にて村内各學校の聯合運動會あり。

二十八日。雨。島に於ける最も由緒ある部落と謂はれる内城部落を訪ね、内城校の宮武校長、橋口、有川先生等の御骨折に依り、宗ツル女（七十歳）に昔話十餘話を語つて頂く。尙同女より話上手の名ある村山次郎氏の在るを敎へられる。

二十九日。有川氏等の御案内にて、内城部落背後の越山の一軒家に村山次郎氏（六十一歳）を訪ふと、今しがた田圃へ行かれたといふので山の峰傳ひに驚ほとゝぎすの聲など聞きながら、芋田の草を取つてゐられる氏を尋ね當てる。無理な要求ではあつたが、氏を近くの集會所へ案内して、何でも良いからとて試みに語つて貰ふ。「蛸取長者」「炭燒長者」等、話の纒りが良く調子も本格的である。優秀な傳承者である。

先生方の手廻しで茶菓など運ばれるに及んで、氏もそれなればとて膝を崩して話し出され、夕方までに十餘話語られる。

夜も引續き内城校宿直室で村山氏のお話を伺ふ。聽手は筆者の外に先生方三名、窓外は瀧の樣な豪雨。甲式筆記を試み度い話もあつたが、氏も齒が惡く發音聞取難く、且つ早口の方で意の如くならず、有川氏の通譯入りで辛うじて乙式筆記をする。

三十日。雨。伊延部落の東老人が訪ねて來られ、傳說など語られる。

三十一日。有川氏と再び村山氏を訪ふ。氏は積上げてあつた新しい疊を敷いて吾々を迎へられた。「灰坊」「山の神と童子」等優れた話があらはれたが、燒酎が出て話の雰圍氣が變つたので辭去する。

——村山氏は十六歳より十九歳迄の間、亡喜美吉老人の下男として働き、その間に同老人より多くの昔話を聞かされし由。老人は、自分の語る話は後の世に殘し度いからだとて、語つた後一一今の話を語つてみよと言はれた程の人といふ。

六月一日。有川氏の計ひで、知名村具志檢部落の差司窪盛氏（五十六歳）の御話を伺ふ事になる。氏は近在に聞こえた昔話の名人で、賴まれて病家悔家のお伽をする事もあるといふ。大なる期待を以つて、再び小米の谷口旅館に移る。

三日。午後、差司氏は有川氏に伴はれてやつて來られた。一見純朴そのものゝ如く、對談する言葉もおど〳〵と口籠つて聞取れない位で、話の名人といふ印象など聊かも與へられない。處が試みに語られた「猫の面」の話は、冒頭から結末まで靜かに整然と一絲亂れぬ言葉と音律で綴られ、一座を悉く魅倒して了つた。驚歎すべき話術である。しかし又何と此島の方言の表現力の素晴しい事だらう。これを完全に文字に寫す事は勿論不可能であるが、出來る限りに於て甲式記錄を殘さねばならないと決意する。

所謂昔話の氣分構成に必要な條件は出來る丈話者の希望に從ふ事にし、いよ〳〵明日より氏の話の盡きるまで此の宿で語つて貰ふ事になる。

四日。一里も奥の部落から、どしや降りの中を差司氏は約束の午前十時にやつて來られた。時間を氣にする事なく、茶を綴り世間話など交じへながら、夕方までに七話を語つて貰ふ。

――差司氏の話はテンポが緩いので、言葉が分り良く從つて筆記能率も増大した。優秀な話は處々繰返し語つてもらつて、甲式筆記をする。

五日。小雨。差司氏の話第三日、六話。

六日。雨。差司氏の話六話。

八日。風雨。差司氏の話第五日、「白鳥の姉」其の他七話。

九日。雨。差司氏の話十話。「姉と弟」の話は第一日の「猫の面」の話と共に、氏が最も好むもので、病家悔家ではよくこれを語つたといふ。

十日。差司氏の話十四話。氏は最初昔話は七十餘話知つてゐると言はれたが、今日迄に五十三話を語つて、これで終りだと言はれた。

――差司氏は無理に依頼されて、四度程病家悔家で昔話のお伽をした事があるといふ。此の島では古くより昔話を伽に語る慣習があつたが、專門の話者といふ者はなく、親族中に昔話の話し手のない時他人に依頼する事があつたといふ。奄美大島では十八夜、二十三夜等の月待の夜に昔話が語られてゐるが、南の島々の昔話はかうした機會に發達し保存されて來たのであらう。

差司氏の話は主として氏が十二三歳の頃、小米部落の池地老人（十八年前七十九歳で死去）から語り承いだもので、池地老人は若い頃和泊部落の土持家に奉公してゐて、同家の主人から聞傳へたものといふ。尙此の老人は晩年ユタ（占ひ祈禱等を行ふ者）になられたといふ。

十一日。差司氏に、島一番の昔話の話し手は上平川部落の平前信氏だから、是非聽いて見られよと言はれ、氏を訪ねると氏も快く明日より小米の宿で話して下さると言はれる。

十二日。平氏見へらる。氏は標準語も十分に話せる人であるが、昔話はやはり島言葉でないと本式に語れないとて、優れた話は方言で語られた。話の形式と言ひ節調と言ひ、差司氏に讓らぬ名話者である。

十三日。平氏の話七話。

――平氏の話は多く氏の亡父から聞承いだもので、氏はその語調を非常に尊重され、時々意味不明の言葉なども傳承のまゝを用ひられた。

平氏の御話はもつと時間をかけて承り度かつたが、農繁時の事であり、又便船の都合もあつて此度の採集はこれで打切る事にする。

十五日。豪雨の中を和泊港發喜界島に向ふ。

沖永良部島普話

著者　岩倉市郎
發行者　橋浦泰雄
東京市淀橋區戸塚町一丁目二二〇番地
印刷人　河田保治
東京市淀橋區戸塚町一丁目二二〇番地
印刷所　明立印刷株式會社

昭和十五年二月十五日印刷
昭和十五年二月十八日發行
（定價一圓五拾錢）

發行所　東京市杉並區久我山三ノ一〇八　民間傳承の會
發賣所　東京市神田區一ッ橋二ノ三　岩波書店

파 K-13

32.6.30